

2 私を育てたあの時代、あの出会い

学校を越えて県全体で高め合う大切さを学んだ
沖縄県立総合教育センター◎伊志嶺嘉典

4 特集

つなげる 中学校と高校の指導〈後編〉

- 6 数学……………粘り強く考えさせる指導と生徒同士の「教え合い」を重視し
中高の学びをつなげる
愛知県岡崎市立矢作中学校◎鈴木淳司 / 愛知県立刈谷高校◎岡田保則
- 9 理科……………「理科嫌い」を増やさない指導が新課程でも鍵となる
兵庫県立家島高校◎木村篤志
- 11 国語……………読み取る力と批判的に読む力、二つの国語力を中高で共有する
東京都立西高校◎大越喜文
- 13 インタビュー 活用を通じた動機づけと学習法の指導が中高のギャップを埋める鍵
東京大大学院教育学研究科長・教授◎市川伸一

16 指導変革の軌跡

- 16 埼玉県立浦和西高校
進路指導体制の構築◎進路指導の体系化で気付きを与え生徒に自立を促す
はるひがおか
- 20 愛知県・私立春日丘中学・高校
6年一貫教育◎6年後を見据え、基礎学力・学習習慣の定着を図る
- 24 北海道函館稜北高校
組織力向上◎学校組織の活性化と授業の本質的な改革で「確かな学力」を育成

28 30代教師の「転んでも起きる！」

「授業者」である前に一人の「学習者」として考える訓練を重視した授業を目指す
広島県立尾道北高校◎平山成樹

30 生きたデータの徹底活用

2年生2学期、「中間層」に前を向かせるための意識付け

34 未来をつくる大学の研究室

キノコを分類して特徴を把握し酵素などを新技術に生かす
鳥取大 農学部附属 菌類きのこ遺伝資源研究センター

38 新課程への助走

新課程におけるカリキュラム編成の考え方〈PART2〉

42 大学選択 新たな視点

学習意欲を高めようと初年次から工夫する大学

48 VIEW'S SQUARE

東日本大震災の被災者の皆さまに、心からお見舞い申し上げます。 VIEW21編集部一同
<http://benesse.jp/berd/> 本誌記事は、Benesse教育研究開発センターのウェブサイトでもご覧いただけます

今、振り返る教師としての原点

私を育てた
あの時代、あの出会い

学校を越えて県全体で 高め合う大切さを学んだ

沖縄県立総合教育センター 伊志嶺 嘉典 ISHIMINE YOSHINORI

進路実現のため、生徒一人ひとりに全力で向き合う。これは、まさに教師の日常である。そして、その積み重ねこそが次代の社会づくりへとつながっていく。俯瞰的な視点を持つことの大切さに気付いた教師が、先輩からの学びを語る。

いつも近くにいた恩師



又吉孝一先生は母校の沖縄県立那覇高校在学中の恩師です。

当時、既にグループ学習を授業に取り入れたり、誤答の解き直しノートを生徒に作成させて自立的な学習を支援したりと、後年、同じ数学教師となる私の手本となる指導を数々行っていました。しかし、何より私が又吉先生から学んだのは、教師としての視野の持ち方でした。那覇高校を卒業して又吉先生に再会したのは、5年後の初任者研修でした。数学の面白さを生徒と味わいたいと願って教師になった私ですが、現実には、

進路多様校の2年生のクラス担任として、生徒を学習に向かわせるために奔走していました。生徒を少しでも理解しようと家庭訪問を続け、授業力を高めるために教科を問わず先輩方の授業を見学していたその頃、県の指導主事となった又吉先生に学ぶ機会を得たのです。

生徒を理解するために面談を繰り返す。そして、将来に目を向けさせることで生徒の力を引き出す……進路指導の根幹となる考え方や指導方法を学ぶことで、私は又吉先生に背中を押していただいたように思います。その後私は離島の高校、県内有数の進学校と、環境の異なる高校に勤務しました。又吉先生には指導主事としてはもちろん、

他校の教頭、校長になっても、折に触れてアドバイスをいただきました。

又吉先生は県外の先進校を精力的に訪問されていました。「沖縄県全体の教育力を高めた」と、そこで学んだ指導、更にそれを実践した経験を、他校の教師にも惜しみなく全て話してくださいました。実際、又吉先生の紹介した取り組みで県内に広まり、今も続いているものはいくつもあります。例えば、私が「日々課題」と呼んでいる取り組みもその一つです。毎日、生徒は始業前に問題を解き、1年の積み重ねを記録としてつづります。生徒にとっては弱点を発見したり自信を高めたりするツールになりま

すし、教師にとっては生徒が問題に取り組む様子を観察し、言葉交わしていく生徒把握の機会になっているのです。「短い時間でもいいから、生徒の言葉に耳を傾けなさい」と口酸っぱく教えていただいた私が、大切に行っている指導の一つです。

県全体のために

又吉先生が退職された今でもよく連絡し、いろいろなことを相談しています。私は今年から研究主事として教職経験者研修を担当することになりました。先日、又吉先生に電話をしたところ、その3日後には資料まで作成し、私に会ってくださいました。資料を同僚に見せると、「私もぜひ活用したい」と言わ

先輩教師の言葉

沖縄県のため
自分に出来ることを
続けていきたい

元・沖縄県立総合教育センター所長
MATAYOSHI TAKAKAZU 又吉孝一



沖縄県の高校生は一言で言えば「のんびり」。那覇

高校のような伝統校の生徒であっても、「大学入試は全国の高校生との競争だ」という意識は乏しかったように思います。そして、それは生徒だけでなく、教師にもいえました。生徒の視野を広げ、目標を高く設定させ、全国の難関大へ送り出そうという気概と方策がもつ必要でした。私が九州をはじめ、全国の先進校を訪問し、その取り組みを紹介したのも、県内の先生方に刺激を与えたかったからです。もちろん、私が刺激をもらうこともたくさんありました。皆、沖縄県全体の学力を底上げしたいと思っていたのです。全国の取り組みを

●左 またよし・たかかず 数学科。琉球政府立(当時)八重山高校を初任に、県内の各校の教壇に立つ。首里高校校長、沖縄県立総合教育センター所長などを歴任。現在、琉球大にて非常勤講師。
撮影○那覇高校にて

●右 いしみね・よしのり 数学科。初任は大平高校(現在は陽明高校に統合)。その後、宮古高校、向陽高校、那覇国際高校を経て、11年より沖縄県立総合教育センターに勤務。

れたので、コピーを渡しました。又吉先生の経験が土台にある資料ですから、これほど信頼できるものはありません。
これまで又吉先生から「こうしなさい」と答えを提示されることはありませんでした。いろんな選択肢を私の前に並べて、「どれも可能性がある。きみはどれを選ぶ?」と私に考えさせるのです。

振り返れば、他県の取り組みを私たちに紹介するときも「いろんなやり方があるのだから、学校の状況を踏まえて、自分に合ったものを選択すれば良い」と話されていました。個々の教師が成長し、考えの幅を広げることが又吉先生はとても大切にしていたのです。
目の前の生徒のために、そして沖縄県全体のために。教師と

してのキャリアステージに見合う視点を、私は何年もかけて又吉先生に教えてもらいました。そして今、きっと私は、又吉先生の思いを受け継ぐ番になったのだと思います。
近年、沖縄県では国公立大をはじめ大学進学者数が増加しています。しかし、生徒は今も沖縄県が抱える経済的な厳しさの中にいます。一人の教師の力だ

けではどうにもならないことも確かにありますが、それでも私たちは最大限に生徒を支援しなければなりません。
沖縄県の置かれている状況を打破する人材、地域を活性化してくれる人材を育てていくために、又吉先生をはじめ先輩、同僚、全ての教師が学校を越えて一丸となる。そのための支援をしていきたいと思っています。

共に学び、各校の状況に合わせて出来ることから無理せずやっついこう。ただし、いったんやると決めたら、妥協はしない。そういう思いでした。
私が伊志嶺先生たちに伝えてきたことは、自分が始めた取り組みだけではありません。先輩たちに教わってきたこともたくさんあります。先輩に多くのアドバイスをもらって、私は成長できました。だから自分も同じことをしているだけです。

私たちの仕事は、「こうすればうまくいく」という正解が分からないことがたくさんあります。本当にこれで良いのか、考えると不安になることばかりです。それでも伊志嶺先生ら先輩の先生たちは沖縄県のために頑張っている。そんな姿を見ると出来る限り応援したいと思うのです。

既に退職して5年が経ちました。現在も多くの後輩たちが現場で活躍しています。私が役に立てることがあればいつでも声を掛けてほしいと思います。沖縄県のため、自分に出来ることを続けていく。そうすることで私は、多くを教えてくださった全国の先進校の厚意に報いることが出来ると思っています。

つなげる

中学校と

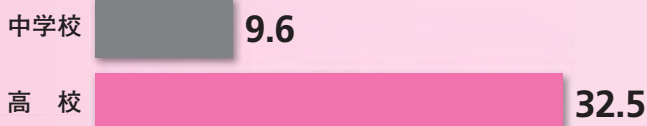
高校の指導

〈後編〉

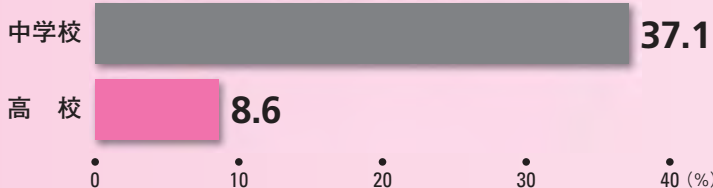
前号の6月号では、中学校と高校の違いと、克服すべき課題を調査結果と教師による座談会を基に整理した。今号では、教科指導をどのようにつなげたら良いか、現場教師の実践や研究者のインタビューを通して考える。

どのような授業を心掛けていますか？

■ 教師主導の講義形式の授業



■ グループ活動を取り入れた授業



注)「多くするように特に心がけている」の%
出典 / Benesse 教育研究開発センター「第5回学習指導基本調査」(2010年)

中学校教師と高校教師では、
授業方法に対する意識が大きく異なっている。

6月号から見えてきた、中高接続のポイント

ポイント1 中学校と高校がそれぞれの段階での「自立」の形を追求する

ポイント2 中学校までの学習歴を踏まえ、中高での教科指導の段差をなくす

中高での教科指導をスムーズにつなげるヒント

1 生徒の姿勢と教師の「かまえ」をつなげる

生徒の「学びへの向き合い方」をつなぐ

- ・ 解答を導くプロセスを重視して考えさせる【数学 P.6】
- ・ 生徒同士に教え合わせる【数学 P.6】
- ・ 最後まで粘り強く考えさせる【数学 P.6】

教師の「教科を通じて育てたい生徒像」をつなぐ

- ・ 抽象概念を理解させる【理科 P.9】
- ・ 文系の生徒にも理科の本質的な面白さを伝える【理科 P.9】
- ・ 中高の教師が授業で「読み取る力」と「批判的に読む力」をどう付けるか話し合う【国語 P.11】



2 「習得・活用・探究」の観点でつなげる

【インタビュー P.13】



授業方法

- ・ 授業で、教科と社会とのつながりを意識させる
- ・ グループ学習を取り入れることで授業内容の定着度を高める
- ・ 家庭で学習させたことを確認する時間を授業で設ける

家庭学習

- ・ 各教科で効果的な学習方法を具体的に指示する

東京大大学院教育学研究科長・教授 **市川伸一**

粘り強く考えさせる指導と 生徒同士の「教え合い」を重視し 中高の学びをつなげる

愛知県岡崎市立矢作中学校 **鈴木淳司** / 愛知県立刈谷高校 **岡田保則**

中高の学びをスムーズにつなげるには、教科の内容と共に、授業形態や家庭学習の進め方にも配慮する必要がある。中高それぞれの数学教師が、教科指導における具体的な実践や接続の可能性について語り合う。

**粘り強く考えずに
すぐに答えを求める生徒たち**

——**数学の指導を通して感じられて
いる生徒の課題をお話してください。**

岡田 高校では、以前と比べ、同じ問題の正答率が年々下がり、授業の進度を遅くする必要があることなどから、生徒の学力の低下を感じています。問題への向き合い方も変化し、手順を軽視して「答えさえ合っていれば良い」と考える生徒が増えました。「どうしてこの答えになったのか」と質問すると、平然と「公

式だから」と答える生徒もいます。

鈴木 中学校も、高校と同じように、答えだけを求める生徒が増えていきます。時代の風潮やこれまでの学習への取り組みなどが背景にあるのでしよう。そうした生徒は、数学をつまらない教科と感じることが多いようです。答えを出すことだけに目が向いて、じっくり考える面白さを知らないからです。

そこで、中学校でも授業でプロセスを重視してよく考えさせることを心掛けています。数学の学習を通して考えることは、成長期の生徒の思

考力を鍛えるという意味でも大切です。また、学力だけではなく、数学を通して忍耐力を育てたり達成感を与えたりして、人間的な成長を促したいという思いもあります。

岡田 高校の数学では、答えに至るまでのプロセスを、相手が理解できるように説明することが求められます。中学校の段階では手順を逐一書かせることが多いと思いますが、高校ではむしろ、割愛できるところは割愛し、思考のプロセスを過不足なく答案に再現する指導に重点を置きます。例えば、順列・組み合わせや

確率などは、思考のプロセスを整理するのに適した分野です。答えに至るまでの道筋が長いいため、数式を用いてコンパクトに説明する必要があるからです。生徒に口頭で説明させ、それに対して質問させるといやり取りを通して、考えを整理して相手を説得する力を身に付けさせていきます。

答えだけを求める傾向は、学びにおける忍耐力の無さが一因だと、私も思います。高校でも、そうした生徒の現状を踏まえ、粘り強く考える指導を大切にしています。

すぎき・じゅんじ◎教職歴20年。同校に赴任して7年目。岡崎市立岡崎南中学校などを経て、現職。モットーは「私が諦めない、生徒に諦めさせない」



おかだ・やすのり◎教職歴32年。同校に赴任して5年目。愛知県立岡崎高校などを経て、現職。モットーは、「数学の根底に流れる思想は不変性の追求だ」

中高共に関数が指導上の課題 家庭学習の進め方に違いも

——教科の内容で課題と感ぜられて
いることはありますか。

岡田 関数は高校数学の柱の一つですが、大きくつまずきやすい分野でもあります。文字にアレルギーがあり、中学校でも苦手だったという生徒は大勢います。しかし、関数は慣れも大きいですから、「諦めなければ必ず理解できる」と、生徒に言い聞かせています。

鈴木 確かに関数でつまずく生徒は多くいます。問題なく計算できて、抽象的な「X」に置き換わりと途端に分からなくなるようです。多くの問題を解かせて、徐々にイメージさせることを大切にしています。逆に、図形は比較的楽しく学べる分野ですが、新課程で学習内容が大幅に増えるので、生徒の学力差が広がるのではないかと懸念しています。

——**家庭学習**については、それぞれ、
どのような指導をされていますか。

も速くなりますから、復習だけでなく、予習も不可欠です。教科書は一人で読んでも分かるように出来ているため、予習で例題を解き、「次の時間に何を学ぶか」を理解して授業に臨むように指導しています。授業はそれを前提として組み立てており、特に大切なことを教えて理解を深めると共に、一歩深い内容に踏み込みます。

授業で前時の復習をせず、どんどん進むことも中学校との違いでしょう。高校に入り、最初はカルチャーショックを受けるようです。家庭学習によってついてこられるようになることが必要だと思います。

鈴木 本当は中学校でも予習をさせるため全員には求められません。基本的に予習をしなくても理解できる授業にしています。しかし、予習が前提という高校の状況をうかがうと、中学生のうちから予習の習慣をもっと付けておく必要性も感じます。宿題は20分ほどで解ける分量とし「授業で習ったことが一人で解ける

か」を確かめさせます。生徒のレベルに応じた問題を出し、「一つでも分かった」という実感を持たせることを大事にしています。宿題は次の授業の冒頭で答え合わせをし、全体の理解度の把握にも役立てます。

個別指導を重視する中学、 全体を引き上げる高校

——**学びに向かう生徒を育てる上で
実践されている指導についてお聞かせください。**

鈴木 中学校では学力の個人差への配慮がポイントです。どのレベルの生徒にも意欲的に考えさせるために、私の授業では一人ひとりの学習状況を把握し、個々の学力に見合った課題を出すことを心掛けています。例えば、式の立て方が分からない生徒がいたら、先に計算の練習をして自信を付けさせてから立式の学習をします。そうした学習の積み重ねによって「やれば出来るようになる」と実感すれば、自ら学習に向かうようになり、将来、困難に直面しても何とか解決しようとする

姿勢が生まれるはずで、手間ひまの掛かる指導のため、休み時間なども利用して気になる生徒を支援しています。

岡田 高校では、中学校のような個別指導はなかなか出来ません。そこで、全体を引き上げるためにしばしば「我慢してついてこさせる」指導をします。森の中を歩いている時は道がどこにつながるのか見えませんが、高い所に立つと全体が見渡せます。高校の数学は、そのように後から振り返って初めて学習内容が有機的につながるが多々あります。

逆に言うと、全体像が見えるまで学習の意義を見いだしにくい面があります。例えば、1年生で学ぶ因数分解について、生徒から「何のために学ぶのか」と聞かれても、「後で役立つから」としか答えようがない時期もあります。そういう時は「今は我慢をする場面だ」と伝えます。数学が得意な生徒は少し厳しくてもついてきますが、苦手な生徒は分からないと諦めてしまいがちです。

鈴木 教科指導から離れますが、中学校では行事や部活動などを通して

我慢の大切さを教えることも、結果的に我慢強く考える力の育成につながるかと考えています。あの手この手で生徒の思考する力を育てています。

岡田 数学が社会で役立つことを教えたり、少し先を見せたりする指導も有効でしょう。高校生なら大学で学びたいことを考えさせるなど、自己実現にうまく結び付けると学習に向かう姿勢は強まります。

生徒の「教え合い」を通して 思考力や表現力を伸ばす

鈴木 学習効果を高める上で欠かせない学習活動に「教え合い」があります。一通り学習した後にペアやグループで問題を出し合うなどして教え合うと、分かった生徒は教えることで、分からなかった生徒は教えられて、共に理解が深まります。更に、伝え合うことで表現力も伸びていきます。教師がクラス全員を個々に教えるのは容易ではありません。そこで「クラスの一人ひとりが先生である」と伝え、理解の早い生徒には「学習のリーダーになりなさい」と言って教え合いを促しています。

岡田 中学校の指導とのつながりも意識して、高校でも生徒同士が教え合う場面をもっと増やしたいと思えます。現状では、授業中は時間的に難しいため、補習など授業外の学習では2、3人で学び合わせて相互理解を深めさせることがよくあります。論理的に説明し合うことで頭の中が整理される効果があります。

特に、習得した知識を活用する演習問題などは、一人で取り組んでいると行き詰まることがよくあります。そういう場面で教え合いを取り入れると見方が広がって、目からうろこが落ちるように問題が解けることがあります。

鈴木 教え合いを通してクラスの人間関係が深まることも見逃せない効果です。学習規律などが整ったクラスでは、教え合いが自然と深まります。すると、クラスが一つになり、志望校は違っても一緒に受験に向かっっていくような温かい雰囲気生まれます。

中高が相互理解を深めて 指導に連続性を持たせる

今後、中高の接続を深めていく

上で、どのような視点を大切にしたいとお考えでしょうか。

鈴木 考えるプロセスを大切にしたいと心掛けながらも、時間的な制約や入試対策などにより、速く正確に問題を解く指導へと流れてしまいうことになることがあります。しかし、今日の対談を通して、考える指導が高校での学びにつながっていくことを改めて実感し、今後も時間をかけてじっくりと考えさせたいという思いが強まりました。

岡田 高校の教師にとって、新入生は「一通りの学習を終えた生徒」であり、中高の教員の交流がないと、中学校で「どのように教えられてきたか」はなかなか見えませんが、しかし、言うまでもありませんが、生徒にとって中高は連続した学びの中にあります。鈴木先生のお話から、中学校でも学びのプロセスの指導を大切にされていることがとても伝わってきました。そうした指導の実態を理解すれば、生徒に対して「中学校ではこう教わったでしょう？」などと投げ掛け、連続性を持たせることで、生徒を学びに向かわせることが出来ると感じました。

理科

概念理解の指導が 中高共に不十分

高校の理科教師にとって、中高接続の一番の課題は「理科嫌いをいかに増やさないか」という点に尽きると思います。

高校ではどの教科でも中学校と比べて学習内容が格段に難しくなり、中学校時代に家庭学習をしていなかった生徒でも予習や復習をしなければ授業についていきません。そうした状況は理科でも同じなのですが、生徒は国語、数学、英語の家庭

「理科嫌い」を増やさない指導が 新課程でも鍵となる

兵庫県立家島高校 木村篤志

理科は、新課程で科目構成が変更され、中学校に移行される内容が多い。文理選択の一つのポイントとなる理科の指導は、中高接続においてどのような課題があるのだろうか。

学習に手一杯で、理科に時間を割くほどの余裕がありません。理科教師はその現状を十分認識し、授業だけで生徒に十分理解させようといういろいろな工夫をしていると思います。

担当科目の化学というと、ポイントとなるのは多くの生徒が苦手とする化学反応式と物質量の計算です。今までの赴任校では1年生で履修させていましたが、中学校時代に理科の成績が良かった生徒でもつまずきやすく、それをきっかけに理科に苦手意識を持つようになる生徒が大勢いました。しかも、物質量の計算は、

酸と塩基、酸化還元、有機化合物など、化学での計算の土台となる部分です。1年生でここをいかに乗り越えさせるかが重要なのです。

つまづく要因としては、科学概念の理解が不十分であることが挙げられます。中学校では、たとえば指導したくても、知識の定着で手一杯なのではないでしょうか。更に、科学概念は抽象的なものであり、例えば原子や分子は目に見えません。現行課程において、もの大きさ、量、単位、間隔といった概念を、中学生がきちんと理解するまで指導すること

は難しいと思います。結果として、科学概念を理解できないまま高校に

きむら・あつし◎教職歴29年。同校に赴任して2年目。教務主任。担当教科は化学。兵庫県立小野高校などを経て、現職。小野高校では進路指導主任も務める。



入学し、内容が難しくなった理科に向き合った時に立ち行かなくなってしまうのです。

ところが、科学概念を理解できていなくても演習問題を頑張つて繰り返せば、高校入試は突破できますし、センター試験でもある程度の得点が取れるようになります。そのため、効率的に入試を突破する力を付けることに主眼が置かれ、科学概念の理解に時間をかけることを重視しにくいのが現状です。

私は、そこに大きな落とし穴があるように思えてなりません。これでは入試のためだけの理科学習になつてしまい、理科そのものの面白さや本質を知らないまま卒業させてしまうこととなります。理科の学習を諦めさせずに3年生まで引つ張り、物事の本質をつかもうという姿勢を身に付けさせるところまで、一人でも多くの生徒を持つていくことが理科教育の使命だと思えます。

中学校・高校とそれぞれの事情があり、6年を通じて生徒を育成する方法を見いだし、実践するのは容易ではありません。しかし、科学概念の指導を追究することを怠つてはな

らないと考えています。

低学年で理科をどう履修させるのか

中高接続の課題はカリキュラムにもあります。新課程では理科に科目変更があり、どのようなカリキュラムにするか各校で検討していると思います。現行課程では、1年生は理科総合を2単位というケースが多く見られました。新課程では、学校の方針によりますが、進学校の多くが3年間で四つの基礎科目から3科目の履修とし、1年生でそのうち2科目を履修するカリキュラムとするのではないかと思えます。そうすると、1年生で物理、化学、生物、地学からどの組み合わせにするかが、中高接続の課題であると共に、大学入試につながる課題にもなります。

新課程では内容面の課題もあります。中学校では数学と理科が先行実施されています。理科は中学校での学習内容が増え、高校から中学校へ移行した内容もあります。そのため、初期指導の難しさが緩和されるのではないかという期待感があります。しかし、私は楽観できないと考

えています。教える内容が増えるが故に、生徒の理解度の差が広がるのではないかと危惧しています。

化学ではイオン分野が中学校に移行したので、授業の導入で引き合いに出そうと考えています。多くの先生方が既習事項や身の回りにあることと、今習っていることを関連付けながら授業を進めていると思います。私の場合、教科書がどのように展開しているのかを生徒に意識させるような授業を心掛けています。この用語は別の何ページに書いてある事項とどう関連するのか、実際に教科書をめくらせながら説明し、化学の事象にはさまざまつながりがあり、それが化学の面白さであることを感じてほしいからです。

今後は、中学校で変化した学習内容を考慮した導入が必要になるでしょう。しかし、高校での学習内容が簡単になるわけではありませんから、入学生の実態をしっかりと見て授業を進めるといふスタンスには変わりはありません。「授業で勝負」という点は新課程でも同じです。理科が少しでも楽しいと思えるような授業を追究していきたいと思えます。

文系の生徒にこそ理科をしっかり学んでほしい

更に新課程では、文系の生徒に対する指導が重要になると考えています。数学や理科が苦手という理由で文系を選ぶ生徒は大勢います。しかし、多くの生徒が三つの基礎科目を履修するようになるわけですから、私立大文系を志望する生徒でも理科をしっかり学び、科学的素養を身に付けられる機会となるわけです。

私は特に、小学校教師を目指す生徒にこそ、理科をしっかり学んでほしいと考えています。国公立大志望ならセンター試験で理科が課せられています。私立大に進み小学校教師になる生徒も大勢います。私立大文系の入試で理科は必須科目でないため、高校で理科を十分に学習していない可能性ががあります。科学概念の理解が十分でないまま小学校教師となり、その指導を受けた子どもは科学概念の土台が出来ないまま中学校、高校へと進学するのです。こうした悪循環を断ち切るために、新課程での指導は理科教師にとつて踏ん張り時であると、私は思うのです。

読み取る力と批判的に読む力、 二つの国語力を中高で共有する

東京都立西高校 大越喜文

新課程において国語、中でも現代文の授業は思考力、判断力、表現力の育成において重要な役割を果たすと考えられる。現代文での中高接続における課題はどのようなものなのか。

入試で必要な読み取る力と 批判的に読む力

中学校と高校で、現代文の授業は何が異なるのでしょうか。それぞれの授業の先にある「入試」から考えてみると、高校入試で出題された素材が、大学の入試問題でも出されることがあるように、「どんな文章を読むか」ということに中高で決定的な違いはありません。

では、何が違うのかと言えば、素材となる文章を「どう読むか」ということでしょう。高校入試でまず求

められるのは、文に書いてある内容を正確に読み取る力です。一方、大学入試では、読み取った内容に対して自分はどう思うかを問う出題、すなわち、批判的に読む力を問うものがより一層多くなります。

現代文には、今を生きる私たちの問題意識が表出されています。現代社会を無批判に受け入れるのではなく、かといって自分が生きる社会を拒絶するのでもない。逃れられないものに立ち向かいながら、今後どう生きるかを考える。つまり、「社会に対するまなざし」を持てるかどうか

が大学入試でも問われます。

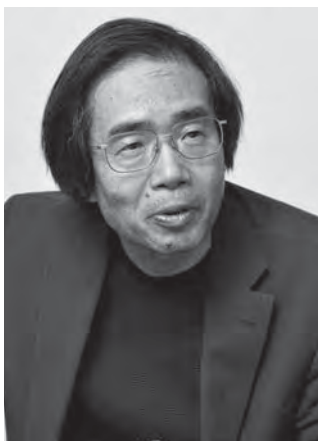
まずは書いてある内容を読み取る力をしっかり身に付けさせる。そして、その力を土台に問題意識を持って批判的に読む力を身に付けさせる。この二つの力を、中学校と高校が連携しながら高めていくことが、現代文の授業では求められると思います。

授業形式や発問を工夫して 批判的に読む力を付ける

では、中学校の国語の授業では、批判的に読む力は問われないので

でしょうか。もちろんそんなことはありません。現代の作家が書いた文

おこし・よしふみ◎教職歴37年。同校に赴任して9年目。担当教科は国語。東京都立五日市高校、国立高校、南多摩高校を経て、現職。



章を読む以上、書き手が言いたいことを読み取るだけでなく、それについて読み手がどう思うかを、中学校教師はきつと問い掛けているはずで
す。教師の力量と生徒の感性次第では、高校の現代文よりも深い部分にまで足を踏み入れていることも多いでしょう。

一方、高校の現代文の授業で、内容の読み取りが不要なのかといえ
ば、それも違います。大学入試では、自分の思うまま読むのではなく、著
作者と出題者の意図をくみ取りなが
ら読まなければいけません。自分の
意見とは違ったとしても「この筆者
の意見はこれだ」と読み取る力が必
要になります。したがって、高校の
授業でも、正確に読み取る指導は必
要です。

正確な読み取りを土台にして、授
業の中で批判的に読む力を身に付け
ていくには、主題に対して生徒が意
見を述べ、それを教師が自分の意見
で批判し、更に、それを踏まえて生
徒が考えを深めていくプロセスが必
要です。教師が一方的に教え込むの
ではなく、生徒と教師双方が問題意
識を持った対話型の授業によって批

判的に読む力が身に付くのだと思
います。

入試学力と生きること 考える力はつながっている

また、文学的想像力と称して、読
み取りをあいまいにしているのは、難
関国立大の個別学力試験の問題は解
けません。例えば、一橋大では例
年、2000字以内の要約問題が出題
されています。この問題文を読み込
むと、2000字でこそ要約できる文
章が出題されていることが分か
ります。問題文が十分に吟味された上
での出題だから出来ることです。

このような力を生徒に身に付けさ
せるためには、高校でも日頃から、
教師は生徒の思考力を把握し、問題
文を吟味しなければなりません。こ
の文章とこの問い掛けならば、生徒
はどのような答えを書くのか。「……
とは何か」と問うべきか、それと
も「……とはどういうことか」と問
うべきか、それによって生徒の答え
は変わります。生徒に問い掛ける前
に、まず教師の指導者としての正確
な読み取りが必要です。

入試問題が解けるようになるとい

うことと、現代をどう生きるかを考
えることは、一見つながりがないよ
うに思えますが、実はそうではあり
ません。例えば、東京大の個別学力
試験の問題は、読解力と記述力だけ
でなく、現代社会に対する問題意識
を持つていないと解けません。文系
であれ理系であれ、自分なりの問題
意識を持つて批判的に読む力がない
と受験にも対応できない。これが国
語の難しさであり、魅力だと思
います。

変わらない国語観を 中高で共有する

読み取る力と批判的に読む力は、
明確に分けられるものではありません。
確かに、中学校と高校では扱
う素材の難易度は違います。中学生か
らすれば、『山月記』や『羅生門』
は難しい作品かもしれません。しか
し、中学生であっても繰り返し読ん
でいくうちに、なんとなく伝わって
くる、心動かされるということがあ
ります。「解けるか解けないか」が
明確な数学などとは異なり、国語に
おいて「読めるか読めないか」は実
ははっきり区別されるものではない

と思います。

中高の指導を充実したものにす
るためには、内容を正確に読み取る
力、問題意識を持つて批判的に読む
力の二つを押さえた授業が出来てい
るか、中高の教師が話し合うこと
で、連続した国語観が共有できるで
しょう。

正確な読み取りを求めた時、全員
が納得できる一つの答えが生まれま
す。しかし、現代人としての問題意
識を持つて批判的に読んだ時、答え
は人それぞれでしょう。国語の授業
に必要な二つの場面の矛盾を埋める
のが、教師の存在だと私は思うので
す。教師が「その文から何を感
じたか」という結論をしっかりと提示す
ることは、現代文の授業に教師が立ち
会った証拠でもあります。

『羅生門』から私は芥川龍之介の
人間としての成長の限界を感じたと
します。この私の結論に納得しない
生徒もいるでしょう。それでもいい
のです。私の結論は生徒が考えるた
めのきっかけなのです。教師の結論
から生徒が更に考えを深めていく。
それは中学校と高校どちらの授業に
も必要だと思っています。

新課程を踏まえた、教科指導の中高接続とは

活用を通じた動機づけと学習法の指導が中高のギャップを埋める鍵

東京大大学院教育学研究科長 教授 市川伸一

新課程で重視されている「習得、活用、探究」を踏まえつつスムーズな接続を図る方法について、認知心理学の立場から学習指導について研究し、小中高校生に学習指導も行う東京大の市川伸一教授に聞いた。

習得と探究の両輪が大切 という学習観を明示

教科指導において、知識・技能の習得と探究はどちらも重要で、車の両輪のようなものであることは誰もが認めることと思います。習得した知識や技能は知的な活動で使われまじ、逆に探究的な活動をしていると自分の知識や技能の不足を感じ、必要感を持って基礎の習得に取り組むこともあります。例えば、スポー

ツで試合に負けた時に、基本技術の不足を痛感して地道な基本練習に励むことと同じです。知識・技能は、知的な活動をする時に縁の下の力持ちとして働くものなのです。

ところが、これまでは人や時代によって教育観がぶれ、どちらか一方を重視すべきだという極論に陥ることがしばしばありました。そうした議論があったことを考えると、新学習指導要領に「基礎的・基本的な知識及び技能の確実な習得」と「それ

らを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくむ」必要性が明記されたことは、二者択一ではなく、両方が大事であるという教育観が明確に示された結果だといえます。

学習内容が難しいからこそ「役立つ」実感が必要

学習のゴールは、知識・技能の習得ではなく、習得した知識・技能を活用して知的な活動を行うことにある

ります。ところが、生徒・教師共に、学校での学習の最終的なゴールが定期考査や大学入試になってしまい、知的な活動が授業の中であまり意識されていないこともあるようです。

日常生活や仕事において、テストはありません。何のために本や新聞を読み、パソコンの使い方を習うのかといえば、そこで得た知識や技能を生かして、自分の意見を誰かに伝えたり、新しいアイデアを出して問題を解決したりするためです。認知

心理学的にいえば、これは強い学習観となり、また何か読もう、何か習おうという次の学習行動につながります。テストがなくても、自分に役立つと感じれば自ら学習するのです。

授業で教科そのものの面白さを伝えることは、もちろん必要です。しかし、それだけでは生徒を学習に引き付けられません。小学校段階ならば学習内容が簡単なため、学習そのものの面白さで机に向かいますが、中学生、高校生になると、発達段階上、知識・技能の習得だけでは満足しなくなっていくます。また、学習が苦手な生徒は、学習内容が難しくなり簡単に習得できなくなると、学習自体に意欲が持てなくなります。

学習内容が高度になる中学校や高校段階では、成績が上位の生徒にとっても下位の生徒にとっても、授業で学んだことが活用できる場面や、自分の生活や将来において役立つことが分かる場面が必要になります。例えば、数学の微積分なら、高校の物理や大学で経済学の学習に使えること、歴史なら、今の日本と諸外国との関係を考える上で知っておくべき歴史的事実など、生活や身の

回りの問題を考える時に学校で習う知識が役に立つ場面はたくさんあります。そうしたことが実感できれば、定期考査のためだけに机に向かうのではなく、自分のために学習するようになるでしょう。

中学校と高校は教科担任制であり、教師も教科の専門知識を豊富に持っているため、学問としての価値を伝えることにのめり込む傾向が見られます。中高共に、他教科の教師と連携したり、地域の人たちに協力を得たりしながら、これまで以上に授業の中で活用場面を意識して設けるべきだと思います。

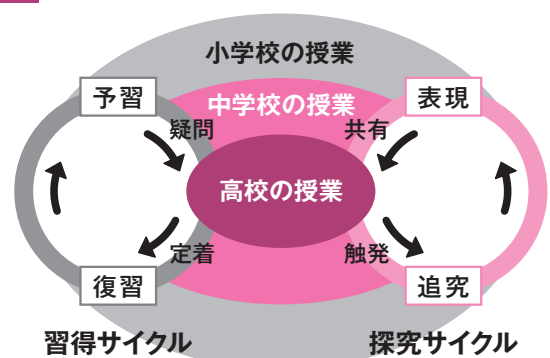
授業でグループ学習を行い生徒同士で理解度をチェック

このような中高共通の課題を踏まえて、中高の学習面での段差を埋める鍵となるのは、授業と家庭学習、両方の質を高めることだと考えます。中高の大きな違いは、高校では学習すべき量が格段に増え、難易度もぐっと上がることです。高校では授業だけで全てを習得することは難しく、小・中学校と比べると生徒の学習における授業の割合は相対的に小

さくなり、授業外での学習の比重が大きくなります(図)。学習法に変化を求められているのに対応しきれず、中学校時代に優秀だった生徒でも、高校では授業についていけなくなるということがよくあります。いくら勉強しても成績が上がらない、勉強していることが何の役に立つかわからない。そうして、だんだんと学習意欲を失ってしまうのです。

まず、授業の効果を高めるために有効な手立ての一つとして、授業中に理解度をチェックし、生徒本人にも確認させる場を設けることが挙げられます。教えるべき内容が多いと授業は講義形式になりがちですが、説明したことが生徒に定着していなければ意味がありません。定期考査でまとめて確認するのではなく、授業中に理解度を確認する機会を設けることで、「分からないまま」という状況をなるべくなくすのです。もちろん、教師一人で学級全員のチェックをするのは難しいでしょう。そこで、新課程で言語力が重視されることを踏まえ、グループ学習を取り入れると良いと思います。例えば数学で、公式と例題を説明した

図 習得と探究のサイクルと授業の関係



*市川先生の資料を基に編集部で作成

後、隣の人と例題を解説し合い、公式をきちんと理解しているか確認してから演習に取り組ませるのです。グループ学習は時間がかかり効率が悪いと思われるかもしれませんが、他者に分かるように説明するという言語活動にもなり、うまく説明できない箇所は理解できていないという内省も促されます。義務教育段階では比較的行われていきますから、生徒はそうした活動に慣れ親しんでいます。注意点は、「言葉の定義を述べた上で具体例を挙げると良い」など、説明のコツをあらかじめ伝えて

おくことです。これは教科書でよく使われている手法なので、教科書を見ながら指導すると良いでしょう。

家庭学習の具体的な手順を改めて教える

中高の教科学習のギャップを埋めるもう一つの鍵は、家庭学習の質向上です。その指導にはどの学校も相当、力を入れられていると思いますが、少し視点を変えると見えてくることがあります。

一つは予習の仕方です。高校では

いしかわ・しんいち◎東京大文学部卒業。文学博士。専門は認知心理学、教育心理学。学習指導に認知心理学の成果を応用する研究として、小中学生向けの学習相談などにも取り組む。主な著書に『勉強法が変わる本』（岩波書店）、『学ぶ意欲とスキルを育てる』（小学館）など。



授業についていくために予習が必要だと、多くの学校で指導されていると思います。しかし、その方法が単に教科書を読む、例題を解くだけでは、自分が教科書をどこまで理解できたのかがあいまいです。そこで、「他人に説明できるかどうか」を理解の判断基準として取り組ませるのです。予習の狙いは、授業内容を全て理解させることではなく、課題意識を持って授業に臨ませることにあります。予習で分からなかった箇所に付せんを貼らせておき、授業の最初に生徒の間を回り、付せんが多く貼られていた箇所を重点的に説明する。授業の冒頭に予習で分かったこと、分からなかったことを隣同士で説明し合うなど、予習をさせればなしにせずチェックすることが、理解を深めるのに有効かと思えます。

もう一つは、家庭学習の具体的な方法を指導することです。「高校生なのだから学習の仕方など教えなくても知っているだろう」と思われるかもしれませんが、私が指導してきた生徒を見ても、学力にかかわら

ず、どのように学習すればよいのかは案外分かっていません。バリエーションも少なく、小学生の時と同じようにひたすら書いて覚える物量主義という生徒は意外といます。学習法は自分で編み出すものだと思うのではなく、なるべく具体的に指導すると効果的だと思います。例えば、英単語を覚える方法にもいろいろあります。具体的な学習法を教え、その場で試して、自分に合うものを取り入れる指導も有効でしょう。

中高共通の課題は書く場面の充実

新学習指導要領では言語活動の充実も重視されています。確かに、中学校も高校も、もっとレポートを書かせる場面があつて良いのではないかと思います。小学校では理科で植物の観察記録を書いたり、夏休みの自由研究でレポートを書いたりして、教室の後ろに張り出しています。大学ではゼミや実験などで大量にレポートを書き、それが成績評価の対象となります。中学校と高校に

「書く」機会が少ないのです。「総合的な学習の時間」や進路学習において、大学・学部研究の結果をレポートにまとめたり、将来設計について書いたり、書く機会が設けられているかと思いますが、日々の教科学習の中でも書く作業に慣れさせることが重要だと考えます。

レポートの添削が負担になると思われるかもしれませんが、生徒が書いたものを全て添削する必要はありませんし、評価するのは教師に限らなくてもよいと思います。高校生くらいになると、友だちからの評価が気になるものです。例えば、好きな本を読んで書評を書き、それをとじて教室で回覧する、理科の実験レポートを何点か比べて、どの書き方が分かりやすいかを話し合う、という活動も考えられます。

新学習指導要領を機に指導を見直される学校は多いと思います。その際、習得、活用、探究という観点を持つことが、中高のギャップを埋め、生徒の自律的な学習を促すことにつながるのではないかと思います。



埼玉県立
浦和西高校

進路指導体制の構築

進路指導の体系化で 気付きを与え 生徒に自立を促す

◎自主自立の精神と高い学力を備え、社会に貢献できる人材の育成を目指す。異文化交流も盛んで、夏休みに2週間のオーストラリア研修を実施。2010年度から県の進学指導重点推進校の指定を受け、複数校による進路指導法開発のネットワーク拠点校となる

設立

1934(昭和9)年

形態

全日制／普通科／共学

生徒数

1学年約360人

11年度入試合格実績(現役のみ)

国公立大は、埼玉大、千葉大、お茶の水女子大、東京外国語大、東京学芸大、東京農工大、宇都宮大、埼玉県立大などに28人が合格。私立大は、青山学院大、慶應義塾大、上智大、立教大、早稲田大などに延べ515人が合格。

住所

〒330-0042
埼玉県さいたま市浦和区木崎3-1-1

電話

048-831-4847

Web Site

<http://www.urawanishi-h.spec.ed.jp/>

変革のステップ

背景

◎生活面の乱れなどから学力が十分に伸びなかった。生徒が進路を意識する時期が遅く対策が遅れ、進学実績が下降していった

実践

◎生活や進路に関し、生徒の気付きを待つ指導から、教師の働き掛けで気付かせる指導に転換。進路指導の系統性も重視

成果

◎27年ぶりに国公立大の現役合格者数が20人を超える。成績中位層の進学実績も向上し、現役合格率が高まる

再考を迫られた 自主自立を促す指導

自ら律し自らの責任で考え行動する「自主自立」を校訓とする埼玉県立浦和西高校。制服はなく、学校行事や部活動などは伝統的に生徒主体で運営され、校内は自由な空気に満ちている。「自由な校風の進学校」と地域からの信頼は厚く、卒業生が我が子を入学させるケースも多いという。

ところが、数年前、教師は自主自立の指導の在り方について頭を悩ませていた。進路指導主任の佐藤和平先生は次のように話す。

「自主自立の意味を理解して自律的に学校生活を送る生徒がいる一方で、学習規律の乱れや遅刻など生活面に問題の見られる生徒が少なくありませんでした。結果として、生徒の力は十分には伸びず、進学実績は年を追って下降していました」

また、課外活動が活発な半面、本気で進路を考えるのは3年生になってからという雰囲気があった。そのため、入試への対策が遅れて浪人生徒も多かった。

『生徒の力を引き出せていない』と、私たちは問題意識を感じていました。しかし、校内には『生徒が自ら気付くまで待とう』『進路は生徒が自分で考えるもの』といった考えが根強く、生徒の自主性を重んじるあまり、

生活指導や進路指導にあまり積極的にはなれずにいました」(佐藤先生)

高校入学時の進路希望調査では、2000人近くが国立大への進学を希望するが、国立大の現役合格者数は例年10人程度。成績中位層の生徒の多くは伸び悩み、入試の直前に第1志望校を変えるケースも目立っていた。

入り口と出口の差が、あまりにもかけ離れている……。それが同校の教師に共通する問題意識だった。



埼玉県立浦和西高校
佐藤 和平 Sato Wahai

教職歴33年。同校に赴任して6年目。進路指導主任。「学校の主人公は生徒、教育の主体は教師という意識で取り組む」



埼玉県立浦和西高校
坂江 隆志 Sakae Takashi

教職歴27年。同校に赴任して6年目。埼玉大に
出向中。「何事も一生懸命、真摯であるよう心掛けている」



埼玉県立浦和西高校
加藤 和江 Kato Kazuo

教職歴27年。同校に赴任して5年目。学習指導部。
「生徒にとって良いと思うことを優先する」



埼玉県立浦和西高校
磯貝 裕子 Isogai Hiroko

教職歴26年。同校に赴任して5年目。学習指導部。
「Where there is a will, there is a way.」を生徒に伝えている

赴任歴の浅い教師が 新たな視点で改革に取り組む

そうした状況にあった同校に契機が訪れた。2007年度、埼玉県の進路指導総合推進事業に指定されたのだ。同校は「進路指導推進委員会」を設置し、学校改革に着手した。委員は、校長、教頭、教務主任、進路指導主任、国語・数学・英語の教科の代表、及び有志の約10人だ。管理職が加わったのは、学校全体で取り組むという意思表明と、スピーディーに決定を下し、即座に実行に移したいという狙いがあった。

まず委員が手分けして全国の先進校を視察。良いと思う取り組みを列挙し、自校の実態に合わせてどうしたら取り入れられるかを検討して学校のランドデザインを作り上げていった。

通常、次年度の学年団の組織づくりは、3月の人事異動発表後に行う。しかし、この年は08年度入学生生の指導について時間をかけて準備しようとして12月に早めた。08年度1年生の学年主任を務めた坂江隆志先生は次のように話す。

「本校での赴任歴が2年ほどの教師を中心に1年生の学年団が構成されました。そして、生徒が入学するまでの3か月間、『3年後を見通してどのように指導していくか』と議論を重ねました」

この期間は、教師の意識を高める上での効果も大きかった。担任を受け持った磯貝裕子先生

はこのように語る。

「学校改革は生半可な気持ちでは出来ません。当初は、本当に自分に出来るだろうかとプレッシャーを感じましたが、他の先生方と話し合い、具体的な準備を進める中で、気持ち前向きになっていきました」

入学直後の学習合宿で 学校の方針を「所信表明」

具体的にはどのような改革を進めたのか。

大学入試で不本意な結果に終わった生徒からよく聞かれたのが、「あと3か月あれば」という言葉だ。そこで、入試に向けての準備を早めるために、2年生12月に行っていた修学旅行を10月に前倒しするなど行事の流れを見直した。

進路指導が体系立てられていなかったことも課題だった。進路意識を育てるには1年生から学習習慣を付け、進路意識を高めることが重要だと考え、3年間の進路指導の流れを検討した。起点となる取り組みとして、入学式の数日後に「スプリングセミナー」(P.18写真)を行った。教科ごとに学習オリエンテーションを行い、予習や復習の方法を徹底指導し、高校生としての自覚を持たせた。

「高校生活は勉強が本分であることを強調して伝えるなど、生徒に対して学校としての『所信表明』を行いました」(磯貝先生)



2008年度の「スプリングセミナー」の自習時間に課題に取り組む1年生。学校生活の基本は学習であることを生徒に意識付ける初期指導として効果を上げている

スプリングセミナーで教師が驚いたのは、生徒が個々に課題に取り組む自習時間の光景だ。自習の会場には、私語一つなく、鉛筆を走らせる音や辞書をめくる音だけがしていたという。

「本校の生徒はこちらが背中を押しさえすれば、入学時点でも学習に向かう力を備えているのだと分かり、改革への自信を深めました」（佐藤先生）

集中して授業を受ける環境づくりに徹底的にこだわる

同校の進路指導の特徴は、1年生から「自己理解」と「進路理解」を重視することだ。

これまでは校外模試も不定期で、自分の実力を客観的に把握できないまま3年生になる生徒が多かった。自己理解の不足により、適切な目標を設定できず、それが対策の遅れにつながっていた。そこで08年度からは、1年生から定期的に模試とスタディサポートを実施し、生徒が自分の学力を把握できるようにした。

生徒に進路の見通しを持たせるには、進路に関する具体的な情報が必要になる。そこで「進路ノート」の活用、大学説明会、大学教員による模擬授業、外部講師の進路講演会などにより、適切なタイミングでの情報提供を心掛け、進路理解を促している。

「自己理解と進路理解が結び付いた時に、生徒の中に目標が生まれます。1年生から個人面談や三者面談を行い、進路情報と生徒の意識を結び付けるようにしています。ただ、進路を決定するのは、あくまで本人と保護者です。我々は情報提供や面談によって、生徒が自主自立を実現する材料をそろえる役割に徹しています」（佐藤先生）

進路指導改革と並行して、目標実現に向けた学力向上への取り組みにも力を入れた。まず、生徒の自主性に任せていた生活面や学習規律の指導の在り方を見直し、丁寧な生徒・学習指導を行うようにした。08年度1年生の担任だった学習指導部の加藤和江先生は次のように話す。

「集中して授業を受ける環境をつくること

が先決だと考えました。遅刻や授業の受け方の指導など基本的なことばかりでしたが、生徒が自覚し、自ら変わるまで続けました」根気強い指導により生活面は徐々に改善した。例年は全学年で毎日百人を超える遅刻者がいたが、最終的にこの学年ではほとんどいなくなった。授業態度も目に見えて良くなった。続いて、隔週土曜日の授業実施、放課後補習や週末課題の充実などにも取り組んでいった。

日々の指導の積み重ねが生徒に大きな変化をもたらす

一連の指導を生徒はどう受け止めたのか。最初に見られたのは反発だった。「スプリングセミナー」の詳細は入学前に告知しておらず、普段の課題や補習の量も先輩に比べてかなり多かった。入学前に抱いていたイメージと異なる高校生活に、「どうして自分たちの学年だけ大変なのか」「こんなに勉強させられるのなら入学しなかった」という声が聞かれた。

「かつての本校を知る保護者からも、『課題が多過ぎる』といった声が寄せられました。それでも、私たちは生徒の力になると信じ、初志貫徹の姿勢を取りました」（磯貝先生）日々の指導は生徒との根比べだったと、加藤先生は振り返る。

「模試を受けない生徒を見つけたら、放課

後に個別に呼び出して理由を聞いて注意し、一人で問題を解かせました。そうした指導を粘り強く繰り返すうちに、徐々にですが、私たち教師の言葉を受け入れる姿が見られるようになってきました」

生徒の意識の大きな変化を感じたのは、修学旅行の直後だという。

「修学旅行後の学年集会で『高校生活の楽しい行事は全て終わりました。これからは全力で大学入試に向けて頑張ろう』と話す、生徒の顔つきがぐっと引き締まるのを感じました。2年間かけて生活・学習指導を続け、自己理解や進路理解を促す指導を行ってきたことで、我々教師の『本気度』が伝わったのでしょうか。意識は一気に受験に向き、スムーズな切り替えが出来ました」（加藤先生）

良い緊張感を持続させるため、2年生の3月までは、大学説明会や各教科の受験勉強講座などイベントを立て続けに実施。3年生になると、模試や入試情報の提供と共に、面談を繰り返して、「第1志望は必ず受験しよう」と強調して伝え、高い目標をキープさせた。

教師が気付きを促す指導から 生徒が影響し合い気付く状態へ

取り組みの成果は、08年度入学生が受けた11年度入試の結果に表れた。国公立大の現役合格

者数は、27年ぶりに20人を超えて28人に上り、首都圏難関私立大の合格者数も前年の9人から24人に増えた。更に、例年なら志望校を下げていた成績中位層が最後まで志望を貫き、首都圏の中堅私立大に次々と合格。現役合格率は前年度に比べて約10ポイント高い79%となった。また、浪人生になった生徒も、合格を手にした上で更に上を目指す者が多く見られた。

「教師の思いを受け止め、『たとえ合格できなくても第1志望は受験する』と考えて実行した生徒が多かったことが良い結果につながりました」（佐藤先生）

現在は、指導方法が変わったことを知った上で入学するため、初めから授業態度は良く、生活面の指導はほとんど必要なくなった。

こうした生徒の変化を喜ぶ一方で、教師が頑張るほど生徒が自ら力を出そうとしなくなる面があることにも気付いた。例えば、生徒会活動や学校行事などは、以前の方が力強かったと感じる場面があるという。また、保護者からは依然として、「教師が指導し過ぎではないか」といった声が寄せられている。

しかし、同校は、現在の指導はあくまでも通過点と捉えている。

「『放っておいて、生徒が自ら気付くまで待つ』状態から、『教師が働き掛けて生徒に気付かせる』状態に進みました。学校の主役は生徒ですが、教育の主体は生徒ではなく教師

です。そのことを踏まえた指導が、一連の改革を経てようやく出来るようになったと思います。次の段階として、『生徒同士が影響し合っただけ』状態に進みたいと考えています」（佐藤先生）

生徒が互いを高め合った好例が、朝学習の広がりだ。改革の初年度、4月に行ったスタディサポートの結果が良かったために夏休みの学習対策が手薄となり、11月の模試の結果が大幅に悪化した。そこで、11年度は1年生と3年生で「始業前の朝学習」を取り入れた。1年生はスプリングセミナーで得た緊張感を保つため、担任が監督。3年生は昇降口に国語、数学、英語のプリントを置き、自主学習できる態勢をとった。すると、2年生の生徒から「自分たちも朝学習に取り組みたい」との声が聞かれるようになり、その思いを後押しする形で、2年生にも朝学習が導入された。2年生には監督が付かないが、大半の生徒が始業前に取り組んでいる。今では、「前年度の実績を超えたい」という、学年間の良い意味でのライバル心も、指導改善の原動力の一つとなっている。

「いかに自然な形で生徒が気付くきっかけをつくり、本来の意味での自主自立へと導くか。我々教師の指導力が問われる、非常に難しい指導だと思います。しかし、教師が本気でやろうと思えば、生徒は変わると信じて取り組んでいきます」（坂江先生）

今回のテーマに関連する過去の記事はBenesse教育研究開発センターのウェブサイトでご覧いただけます。

2010年6月号指導変革の軌跡「新潟県立高田高校」など

▶▶▶ <http://benesse.jp/berd/> → HOME > 情報誌ライブラリ(高校向け)



愛知県・私立
はるひがおか
春日丘中学・高校

6年一貫教育

6年後を見据え 基礎学力・学習習慣の 定着を図る

◎1965年に中部工業大学附属高校として開校。90年に中学校を併設し現校名に改称。主に中部大への進学を目指す進学コース、国公立大・難関私立大を目指す国際コース・特進コース、6年一貫の啓明コースの4コース制。カナダの姉妹校との留学生交流や語学研修など国際教育にも力を入れる。

設立

1965(昭和40)年

形態

全日制／普通科／共学

生徒数

1学年約500人(啓明コースは約100人)

11年度入試合格実績(現役のみ)

国公立大は、名古屋大、京都大、愛知教育大、名古屋工業大、横浜国立大、金沢大、三重大などに98人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、明治大、早稲田大、南山大、同志社大、立命館大、関西学院大など延べ701人が合格。

住所

〒487-8501
愛知県春日井市松本町1105

電話

0568-51-1131

Web Site

<http://www.haruhigaoka.ed.jp/>

変革のステップ

背景

◎公立高校への進学者が中心の地域に位置する。保護者の信頼を得ようと中高一貫校化を打ち出し、進学実績の向上を目指す

実践

◎学習記録などによる学習習慣の確立、「立志式」や「縦割り班」による集団づくり、中高教師の交流による指導力の向上

成果

◎進学実績は向上し、市内屈指の進学校として認知される。中高の接続により教育力は向上し、組織も活性化

中高一貫校化により 進学実績の向上を目指す

春日丘中学校は、春日丘高校創立25周年の節目の年に開校した、市内唯一の私立中学校だ。中高一貫校となり20年が経った今、大学進学実績は中学校創立時から飛躍的に向上し、市内でも有数の進学校へと変容を遂げた。特に、中高一貫の「啓明コース」では、過去5年間で50%を超える生徒が現役で国公立大に合格し、10年度入試では10人以上の旧帝大合格者が輩出した。

もつとも、実績が出るまでの道のりは決して平たんではなかった。二村啓教頭は特進部主任だった当時を次のように振り返る。

「進学実績が出るまでは、保護者会で厳しい意見をいただくことがしばしばありました。『もっと目標と計画をはっきりしてほしい』と真正面から言われたこともあり、保護者の不安を取り除き、信頼感を高めるためには、何よりも進学実績という結果を示す必要がありました」

愛知県は伝統的に公立高校の人気が高く、進学実績の乏しい私立高校が、学力の高い生徒を集めるのは容易ではない。当時の同校も、公立高校に学力が届かなかった生徒を受け入れ、学力を付けさせて大学に送り出すという高校だった。しかし、少子化の波が押し寄せる中で、更

に高い進学実績を保証しなければ学校が生き残ることは出来ないと感じ、中高一貫校という新しい段階へと踏み出したのである。

「毎日の学習記録」「年間学習プラン」で学習習慣の定着を図る

中高一貫校には、高校受験のプレッシャーを与えずに、じっくり時間をかけて生徒を育てられるメリットがある。同校の中学校では、基礎



春日丘中学校・高校教頭
二村啓 Futamura Hiraki

教職歴・赴任歴共に31年。「教師は生徒の灯台。生徒が日々変化する自分の現在地を把握できる存在でありたい」



春日丘中学校・高校
浜本英昭 Hamamoto Hideaki

教職歴・赴任歴共に19年。特進部主任。「どんな生徒も頑張れる環境があれば頑張る。進路実現の出来る環境づくりに努めたい」



春日丘中学校・高校
清水宣隆 Shimizu Nobutaka

教職歴・赴任歴共に19年。中学校教務部主任。「生徒に夢を描かせ、その実現に向けての現実的な力を付けさせたい」



春日丘中学校・高校
長谷川雄一 Hasegawa Yuichi

教職歴・赴任歴共に16年。高校2学年副主任。「教師という職に責任と誇りを持って、生徒一人ひとりの進路実現を手助けしていきたい」

学力の育成に重点を置いている。中学校教務部主任の清水宣隆先生は次のように述べる。

「本校でいう基礎学力とは、高校での学びの土台となる学力のことです。中学1・2年生では、漢字や計算などの基礎事項を徹底して身に付けさせることが、高校入学後の学習効果を高めると考えています」

基礎学力を身に付ける前提として、同校が重視するのは学習習慣の確立である。宿題は担任が必ずチェックする。チェックしない宿題は、宿題とは呼ばないというのが同校の不文律だ。忘れた生徒は担任の監督の下で取り組ませる。また、生徒自身が自由に教科を選んで学習する「自学ノート」にも取り組ませている。

「毎日の学習記録」は、学習習慣の定着に欠かせない取り組みだ（P.22図）。冊子形式の学習記録帳で、日々の生活・学習時間を記入する欄と、日記形式の自由記述欄で構成されている。

「勉強すれば確実に学力は上がるのですが、教師が放っておくと生徒は勉強しなくなりま

す。これは開校以来、本校の教師が意識して指導し続けてきたことです。生徒には中学校に入ったらこれくらいの学習は当たり前と思わせて、学習習慣を付けさせることが大切であり、そうして土台を築くことは高校進学後の成長につながると考えています」（清水先生）

「年間学習プラン」も学習習慣定着に効果を

上げている。生徒は日々の教科の宿題に加え、このプランに明示された学習に取り組む。直近の目標を次々と提示して、間断なく学習に向かわせるのだ。保護者に家庭学習を支援してもらえよう、「年間学習プラン」は学年通信に掲載し、「今は何に向けて学習すべき時期なのか」ということを伝えている。

学年を超えた「縦割り班」で協調性やリーダーシップを涵養

中学校では、大学受験に備えての集団づくりも重視する。「啓明コース」では頻繁に学年集会を開き、「集団全体が良くならなければ自分も成長できない」「生徒同士で高め合っているかどうか6年後の進路を左右する」ということを繰り返し伝え、集団意識を育てている。

10人程度の中学1〜3年生で編成される「縦割り班」も、集団づくりに欠かせない取り組みだ。啓明祭（文化祭）や校外学習、百人一首大会などの学校行事は、この縦割り班で活動する。中学校時代に身に付けたリーダーシップや協調性、共同作業の手際の良さは、高校進学後の行事などで発揮されるという。高校2学年副主任の長谷川雄一先生は次のように述べる。

「高校で職場訪問や修学旅行などの準備をさせると、生徒同士ですぐに計画を立てたり役割分担を決めたりするチームワークに驚か

「毎日の学習記録」

日	時間	科目	時間	科目	時間	科目	時間	科目	合計
4月25日(月)	18:15	英語	70	分	数学	40	分	国語	40
4月26日(火)	18:15	英語	60	分	数学	70	分	国語	20
4月27日(水)	18:15	英語	115	分	数学	45	分	国語	20
4月28日(木)	18:15	英語	40	分	数学	25	分	国語	25

※学校資料をそのまま掲載。図は中学校で運用しているもの

されます。みんなで動かなくてはいけないという意識が根付いているので、決して押し付け合いにならないのも、本校の生徒の良いところですよ。

こうした集団意識の高さは、学習面にも良い効果を出している。高校特進部主任の浜本英昭先生は次のように話す。

立志式では、生徒全員が「立志の灯」というろうそくを立て、一人ずつ壇上に上がり、教師、友だち、保護者の前で「私は将来〇〇になります」と決意表明を行う。将来を決めかねている生徒も、「私は人を助けるような仕事をしたい」というように自分の考えを語る。

「15歳になる節目の年に、自分の将来を見

「啓明コースでは、縦割り班でリーダーを経験した生徒が、学習面でも他の生徒を引っ張っていく場面が多くあります。休み時間や放課後に自習する時も、その生徒を中心に学習したり、男女が関係なく教え合ったりする光景がよく見られます。人間関係が濃密な分、互いに刺激し合い、影響を受け合うのではないのでしょうか」

「立志式」の決意表明が
進路選択の第一歩に

中学校時代から高校卒業後の進路の意識付けが出来る点も中高一貫校の利点である。同校は中学2年生の冬に行う「立志式」を、進路意識を高める契機として重視している。

中高の教師の交流により
中高接続を円滑化

つめ、志を立てることが大切です。志は将来変えてもよく、まずは「旗」を立てることが、進路選択に向けた大きな一歩になると生徒に伝えていきます」（清水先生）

立志式では、事前学習として「過去」を振り返る作業も重視する。生徒は、自分が生まれた時のこと、中学校に上がるまでにどのような苦労があったのかということを、保護者にインタビューする。保護者には子ども宛てに手紙を書いてもらい、立志式の当日に本人に読ませる。これが「原体験」となり、多くの生徒が高校進学後も志を忘れずに受験に向かうという。

中高の教師の相互乗り入れが活発になり、校種を超えたノウハウの共有が可能になったことも、同校の躍進を支える要因の一つだ。

以前は中学校と高校間での異動は少なかったが、最近は高校3年生を経験した教師が中学生を受け持つようになり、中高それぞれの指導経験を反映することが増えた。例えば、長谷川先生が受け持った高校の学年では、中学校で行われていた「基礎学力コンクール」を始めた。国語の慣用句や数学の計算問題などの基礎知識を問う試験で、90点以上の生徒は名前が掲示される。これをセンター試験の基礎固めとして、高

校用にバージョンアップさせたものだ。更に、中学校からの成績推移を見る「累積個表」も、中学校での経験を生かして導入した。

中高の接続や連続性の面でも、教師の相互交流には大きな効果が表れていると、浜本先生は話す。

「学習計画を立てる際、中学校では試験の2週間前に計画を立てさせ、回収して点検し、具体的な計画を立てられるまでやり直しさせますが、高校では用紙を配るだけで、生徒の主体性に任せていました。ところが、自由度が高すぎたためか、生徒が戸惑う場面もありました。中学校で学習習慣や基礎学力の定着など手厚い指導をされている分、高校は面が見が悪いと思う生徒もいるようです。今は中学校との連続性を考慮しながら、少しずつ手を離していく指導の必要性を感じています」

中学校の指導を知っているからこそ、高校への移行をスムーズにする工夫が生まれるのだ。

中高接続により6年後を見据えた教育を意識

高校での指導を経験した教師が中学校でも指導することで、高校卒業時に必要な力を見通した指導を意識するようになるという成果もあった。前述の学習記録も、高校で取り組んでいたものを中学校でも行うようにした。

「当初、中学校では『心を育てる教育』として、日記指導を行っていました。しかし、中学校から高校へ持ち上がり、大学に生徒を送り出した経験から、中学校でも日々の学習をきちんと見取り、大学受験に必要な基礎学力を付ける必要性を感じました」（清水先生）

清水先生は、再び中学校を受け持った時、その学習記録を中学校にも導入した（図）。

このような相互交流が、中高の壁を超えて教師の連帯感や協調性を高めている。

「以前は、高校は中学校から生徒を『もらっている』という意識がありました。今は生徒と一緒に高校へと持ち上がることも多いので、中学校での指導はどうあるべきか、中学校で身に付けた力を高校でどのように伸ばすかということ、これまで以上に考えるようになりました」（清水先生）

「中高のどちらかしか知らなければ、互いに要求し合うだけで終わってしまいます。それぞれの立場を知ることが相互理解につながり、力を合わせて学校全体を良くしていくという意識が芽生えるのです」（二村教頭）

保護者の信頼感が向上 次の課題は生徒の主体性の育成

中学校の併設から20年が過ぎ、市内有数の進学校となった春日丘中学・高校。かつて保護者

会で投げ掛けられたような不安や不信も、今は聞こえなくなった。

「本校には進学校としての伝統がありません。だからこそ、いろいろなことにチャレンジできたのだと思います」（二村教頭）

今後の課題は、学校主導の学習から生徒の主体性を生かした学びへの転換を図ることだと、清水先生は話す。

「学習量が増える高校では、中学校までのドリルや復習中心の学習スタイルでは、その量に対応できません。予習中心のスタイルへ転換し、学習の質を高めなければなりません。その転換がスムーズに出来るよう、中学校でもきちんと支援することが課題です」

高校では、生徒が自分で考える場面を今以上に多く設けたいという。例えば、学習合宿では講義が中心だが、今後は生徒自身に学習する内容を決めさせて、自由に質問しながら学びを深めていくというように、少しずつ手を離していくことを考えている。

「生徒の力を最大限に伸ばすには、学校が一方的に与えるだけでは不十分です。最後は、生徒自身がどれだけ主体的に学びに向かうかが決め手になります。しかも、その方法は一律ではなく生徒の数だけあります。どこまで手を掛けて、どこで手を離していくのか。生徒と向き合い、皆で協力し合いながら模索していきたいと思います」（長谷川先生）

今回のテーマに関連する過去の記事はBenesse教育研究開発センターのウェブサイトでご覧いただけます。

2010年6月号指導変革の軌跡「東京都・私立吉祥女子中学・高校」など

▶▶▶ <http://benesse.jp/berd/> → HOME > 情報誌ライブラリ(高校向け)



◎「創造・良識・健康」を校訓とし、確かな学力を身に付け、自立的・積極的に生きる人材の育成を目指す。2006年に北海道学力向上推進事業、09年に文部科学省「学力向上実践研究推進事業」の推進校に選ばれ、「確かな学力」の育成に向けた改革に取り組む。

設立

1983(昭和58)年

形態

全日制／普通科／共学

生徒数

1学年約200人

11年度入試合格実績(現浪計)

国公立は、北海道大、小樽商科大、北海道教育大、弘前大、東京大、金沢大、はこだて未来大、青森県立保健大、都留文科大などに40人が合格。私立大は、北海学園大、藤女子大、北星学園大、北海道医療大、法政大、東京農業大、東海大など延べ92人が合格。

住所

〒041-0802 北海道函館市石川町181-8

電話

0138-46-6235

Web Site

<http://www.hakodateryouhoku.hokkaido-c.ed.jp/>

北海道
函館稜北高校

組織力向上

学校組織の活性化と授業の本質的な改革で「確かな学力」を育成

変革のステップ

背景

◎学校組織が硬直化し、改革の機運が生まれなかった。普通科高校として特色を打ち出せず、志願者数は減少傾向へ

実践

◎KJ法で課題を整理、ユニット制の導入で組織を柔軟化。生徒の学力向上につながる授業評価、互見授業を行う

成果

◎前年踏襲を是としない前向きな学校組織へと変革。生徒の進学意欲も向上し、2011年度入試は過去最高の実績

前年踏襲を重んじる風土が学校の停滞を招く

北海道函館稜北高校の改革は、2004年、有志の教師によって「静かに」幕を開けた。

当時の同校には課題が山積していた。進路指導一つとっても、模試は希望者のみを対象とし、分析も行わない。入学時点から生徒や保護者の学校への期待は低く、目標に向けて学力を高めようという意欲を持っていなかった。保護者は、生活指導さえきちんとしてくればよいと考え、大学進学を勧めた教師に対して、「進学させるなら他の高校に行かせた」と言われることもあった。地域からは「特色のない普通科高校」と評価され、志願者数は減少していったのである。

そうした状況にあったが、校内に改革の機運はなかった。異動してきた教師が改革の必要性を訴えても取り組みにはつながらず、学年会議で出された個人の意見や企画は全体の場で議論されることもなく、全てが前年踏襲で進んだ。3学年主任の葛西隆俊先生は次のように話す。「本校は創立29年目の若い学校です。創立間もなく赴任された先生も多く、草創期の先輩教師の苦勞を間近で見てきただけに、学校を変えてはいけないという思いもあったのでしょう。改革に着手しようという機運は生まれませんでした」

課題を洗い出し KJ法で難易度順に分類

こうした状況を打破すべく、有志の教師が立ち上がったのが、04年のことだ。課題意識を持った牧野篤校長の呼び掛けで、現在Wisdomプロジェクト委員長を務める福士公一朗先生ら



北海道函館稜北高校
岡田敏嗣 Okada Toshitsugu
教職歴28年。同校に赴任して5年目。教務部長。「モットーは『臨機応変』」



北海道函館稜北高校
福士公一朗 Fukushi Koichiro
教職歴26年。同校に赴任して12年目。Wisdomプロジェクト委員長。「常に『システム思考』で取り組んでいきたい」



北海道函館稜北高校
葛西隆俊 Kasai Takatoshi
教職歴26年。同校に赴任して11年目。3学年主任。「規律ある生活が進路実現の基本となる」



北海道函館稜北高校
石黒勝 Ishiguro Masaru
教職歴25年。同校に赴任して6年目。1学年主任。「生徒一人ひとりと真剣に向き合っていきたい」



北海道函館稜北高校
中森賢司 Nakamori Tadashi
教職歴20年。同校に赴任して8年目。進路指導部長。「結果は困難を乗り越えてやってくる」

6人の教師で「未来構想委員会」が発足した。委員会がまず着手したのは、山積した課題の整理だった。名刺サイズのカードを課題を感じる教師に配り、改善が必要な事項を1枚のカードに一つずつ書いてもらった。そして、課題をKJ法を活用して整理した。

課題は、「古い掲示物がそのままになっている」という小さなことから、「教育課程の整備」「総合的な学習の時間（以下、総合学習）の充実」「分掌の機能不全」といった学校経営に直接かわる内容まで幅広く寄せられた。その数、実に200枚。それらを内容ごとに分け、改善が比較的容易そうなものから、A～Eの5段階に分類した。そして、A・即、対応できる、B・今年度中、C・来年度、D・長期、E・検討不要と振り分けた。

「課題の重要度ではなく難易度で分類したのは、重要度の高い課題は改善に時間が掛かり、改革全体のスピードが遅くなると考えただからです。まずは出来ることから実践して、改善の手応えを多くの先生に感じてもらうことが重要だと考えました」（福士先生）

課題解決に当たっては、基本的に委員会から所管の分掌に依頼する形が取られたが、分掌長の考えによって対応は分かれた。「それは課題ではない」と一蹴されることも多く、委員会でAレベルと判断された課題でも、簡単には解決できなかった。古い掲示物をはがすだけで意見

を言われる、ゴミ箱一つ移動させるのにも人脈を頼って個人的に話をするという具合で、改善は容易には進まなかった。

適材適所の組織運営を 実現する「ユニット制」

既存の分掌組織を通しての改善が難しいと判断した委員会は、「ユニット制」を考え出した。分掌や学年にかかわらず、課題解決に意欲的な教師を集めた少人数のユニットを編成し、ユニットが作成した原案を委員会が検討・調整して分掌や学校全体に提案する仕組みである。

ユニット制の特徴の一つは、必要に応じて編成し、役割が終わったら解散する柔軟な組織だということだ。例えば、学校案内のパンフレットを作成する場合、通常は総務部が担当するが、部内に適した人材がいなくてもある。そうした時にユニットを編成。美術の教師にデザインを、教務の担当者に学校の授業方針の解説などを担当してもらい、それを総務部で統括。そして、学校案内が完成すればユニットは解散する。これ以外にも総合学習、高校受験での推薦入試の導入、カリキュラム編成など、さまざまな課題に対してユニットが編成された。

総合学習へのテコ入れのように大規模な改革が必要とされ、また取り組みの継続性が重視される場合は、ユニットを委員会に昇格させる。

かつての総合学習は、まとまりなくレポートを作成させるなど、取り組みを体系立てられていなかった。そこで、他校で先進的な総合学習を推進してきた教師を軸に、各学年から2人、計6人の総合学習ユニットを編成。大学情報の収集↓小論文作成↓課題研究という、進路学習を軸とする総合学習の新たな骨格をつくった。現在も同様の体制で、常設の総合学習委員会が企画・運営を担っている。

改革の成果を実感することが教師の意欲を高める

改革の成果は徐々に表れてきた。学校生活に対する生徒の満足度は上がり、体系立った進路指導や総合学習などにより、生徒が発表する内容は格段にレベルが上がった。生徒の大学進学意欲は高まり、06年には国公立大合格者が前年度の2倍を超える26人に急増した。

改革の成果が出るにつれ、教師の意識に変化が起きた。改革に反対する声は少なくなり、会議では建設的な議論が行われるようになった。1学年主任の石黒勝先生は次のように話す。

「改革の成果を肌で実感することで、取り組みに協力的な先生が増えていきました。教師集団を活性化させるためには、何よりも結果を示すこと。少人数の努力であっても結果がきちんと示されれば、それまで意志統一が

十分に取れていなかった先生方の意欲も高まり、組織全体が一つになっていくのです」

学校が一つにまとまりかけた時、更なる飛躍の機会が訪れた。06年度から3年間、北海道の「学力向上推進事業」において「確かな学力の向上」を研究テーマとする「Academyプロジェクト」の推進校に選ばれたのだ。

ここに、同校の新たな挑戦が始まった。まず行ったのは「確かな学力」の明確化である。「確かな学力」とは教科学力だけでなく、思考力や問題解決能力、表現力などを含む「総合力」であると定義し、その上で、総合学習の更なる改善、シラバスの作成、授業研究体制の見直しなど活動の幅を広げていった。

生徒の理解度を重視した授業評価を導入

プロジェクトの柱は、授業力の向上だ。取り組みの中心となるのは、生徒による授業評価だ。「授業評価」というと、教師の話す速さは適切か、教師の熱意を感じるかといった印象レベルの評価項目がよく見受けられます。私は以前からこういう方法に懐疑的でした。生徒の評価が高い授業が必ずしも学力向上に結び付いているのか。先進校の先生方に聞いても確答が得られません。単なるアンケートにとどまらない、授業改善につながり、生徒の学

力も引き上げることが出来る本質的な授業評価の構築を目指しました」（福土先生）

そこで、「授業評価ユニット」を編成し、新たな仕組みを検討した。そして、生まれたのが「目標管理手法」による授業評価・改善システムだ。これは、生徒自身が授業内容をどれだけ理解できたか、授業目標に到達できたかという点に絞って授業評価を行う仕組みである。単元の中でどこが分かったのか、分からなかったのか。分からなかった理由は何か、分かったとしたらそのきっかけは何だったのか、などの観点が明確になるように項目を立てた。声の大きさや授業の速さなどの質問は、各教師が必要に応じて任意に設定できるようにしている（図）。あくまでその授業で力が付いたかどうかを知ることがポイントとなる。

この授業評価手法ならば、シラバス・授業の改善に直接的に結び付けていくことが出来る。生徒の理解度が悪かったら、講義よりも先に実験を入れよう、視覚に訴える教材を使ったらどうか、といった改善につながれるのだ。

授業評価は授業研究の一環であるため、全ての教科で年に1回は必ず実施する。各教科の代表者には、授業評価シートの結果と共に、それによってシラバスをどのように改善したのかという結果も合わせて報告してもらい、教師一人ひとりの授業改善の道筋を学校全体で把握している。

授業者と参観者の 対話を重視した互見授業

「確かな学力」育成のために公開授業のテコ入れも図った。同校は改革前から授業公開週間を設けていたが、実際に授業を見合う教師はこれまで、形骸化していた。

そこで、08年度からは、教科ごとに毎年1～2人の教師が代表となって互見授業を行う体制を徹底した。そして、参観者がより建設的な意

見を述べられるよう、参観は1時間の授業だけではなく単元ごとに複数回行うことにした。

授業者と参観者とのコミュニケーションは「授業評価シート」で行う。授業者は本時の狙いや評価してほしいポイントを明記。授業後、参観者は評価してほしいポイントについてコメントし、その他、指導内容や指導法、教材などへの意見や疑問を書いて提出する。授業者は参観者からの評価や意見を読み、回答を記入して参観者に返却する。

現在は教科を超えて互見授業を行い、他教科のノウハウを積極的に取り入れる教科が増えているという。教務部長の岡田敏嗣先生は次のように述べる。

「以前は、授業内容の精選やアプローチ方法、講習内容などを改善する方策を一人で考えあげていました。隣の教室ではどのような授業が行われているのか気になるけれども行動には出られない。他教科の優れた取り組みを見聞きする機会が増え、刺激が生まれると

同時に、教師間の風通しも良くなっていることを感じます」

改革の精神を風化させず 次代へつなぐ

改革から7年が過ぎ、前年踏襲を是としない意識が教師間に定着した。生徒も教師の熱意を受け止め、より高い進路志望を目指すようになった。東京大を含む40人という過去最高の国公立大合格者数を出した11年度入試は、改革の一つの到達点といえるだろう。

09年度から文部科学省「学力向上実践研究推進事業」の指定を受け、現在「Wisdomプロジェクト」として「確かな学力」の育成事業は継続中だ。今後の課題は、教師が異動しても、取り組みの内容や精神を風化させず受け継いでいける組織をつくることだ。進路指導部長の中森賢司先生は次のように述べる。

「本校の改革は自発的な変革に始まり、数年間で学校全体へ広がりました。教師の一つひとつの授業改善により、生徒の理解度も高まりました。学校が大きく変わる歴史的瞬間に立ち会うことが出来たのは貴重な経験です。これからも常に挑戦者という意識を持ち、過去はどうだったのかという視点だけでなく、将来どうすべきかという視点から挑み続けたいと思います」

生徒による授業評価シート（生物）

- 4 定期考査を活用して、次の内容を理解しているか理解度（短期定着度）を測ります。次の生物用語について、だいたいわかった（理解できた）ものを選んでください。（何個でも）
- 1 細胞の発見と細胞説（人名、内容、細胞説（構造と機能の単位））
 - 2 (14、16) 細胞小器官の働き（名称、構造、働き）
 - 3 原核細胞と真核細胞の違い（原核細胞には膜構造がほとんどなく細胞壁はある。植物細胞と動物細胞の違いは2つ（細かくいうと5つ）、全生物に細胞膜が存在）
 - 4 核の働き（1つの細胞に1つが原則なのはなぜ？）
 - 5 顕微鏡の扱い方（手順、絞りの役割、焦点の合わせ方、鏡像は逆像。）
 - 6 ミクロメーターによる計測（接眼ミクロメーター1目盛りの計測、細胞の計測・速度）
 - 7 細胞の大きさ（細胞、小器官の大きさ：葉緑体、赤血球、ミトコンドリア/細菌類>ウイルス、分解能）
 - 8 常識問題：計算
 - 9 半透性（溶質（大きなもの）は通さない、溶媒（小さなもの）は通す。濃度差のある溶液を半透膜で仕切ると、溶媒（水）は濃度の低い方から高い方へ、濃度差を解消する方向へ移動する）
 - 10 (15) 細胞と浸透圧（動物細胞（赤血球）と植物細胞を低張・等張・高張液に入れるとどうなる一浴血、原形質分離、限界原形質分離、原形質分離復帰。浸透圧：細胞が相手の溶液から水を撃つ力。グラフの問題；吸水力＝浸透圧－膨圧）
 - 11 細胞膜の透過性（不完全な半透性、選択透過性（ナトリウムポンプ）、拡散移動、能動輸送と受動輸送、エネルギーの消費の有無）
- 5 授業に関して、説明の声の大きさはどうですか。（一つ選ぶ）
- 1 聞きやすい
 - 2 声が小さすぎて、聞きにくい
 - 3 全体に聞きにくい
- 6 板書の仕方はどうですか。（一つ選ぶ）
- 1 見やすい
 - 2 文字が小さすぎて、見にくい
 - 3 文字が薄くて、見にくい
 - 4 文字が雑
 - 5 その他（ ）
- 7 授業のスピードは、どうですか。（一つ選ぶ）
- 1 速過ぎる
 - 2 ちょうどよい
 - 3 遅すぎる

大半の教師が率先して導入。評価項目の設定や実施するタイミングは教師に委ねられている。教師が課題や不安がある単元の理解度を測ることが出来、テストと併せて用いることで自身の授業の課題がより焦点化する
*学校資料をそのまま掲載

30代教師の転

起

きる！

失敗やつまずきを転機に、授業力を高める！



「授業者」である前に一人の「学習者」として考える訓練を重視した授業を目指す

広島県立尾道北高校

平山成樹先生

35歳

私が乗り越えてきたもの

授業で前を向かせるために

黒板の方を向かせ、ノートをとらせる。新卒で進路多様校に赴任した私の指導は、そこから始まりました。「前を向かんといいけん」と声を荒らげれば生徒は渋々その通りにしましたが、その表情を見て「このままでは、生徒を数学嫌いにしてしまう」と思いました。

そこで、毎回の授業で生徒による自己評価を行い、それを基に発問と説明をアレンジ。説明だけが長くならないよう、合間に一問一答形式の発問を挟むなど、授業のテンポを良くする工夫をしました。また、課題も授業を聞いていれば確実に解けるよう作問し、「分

かった」と実感させようとなりました。

少しずつ、私が何も言わなくても静かに授業を聞く生徒が増え、表情から数学への関心が感じられるようになりました。赴任6年目には、「もっと数学を学びたい」と、国公立大の数学科に進学する生徒も現れたのです。

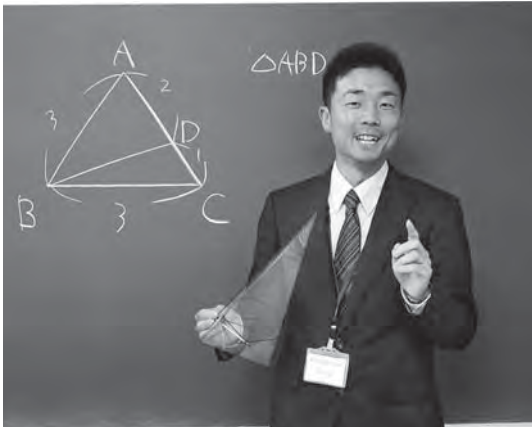
生徒を学習に向かわせられない

2校目となる尾道北高校に赴任した時は、「県内屈指の進学校で生徒の力を伸ばしたい」と意気込んでいました。そんな私に、校長は「今までの指導に頼らず、一年目だからこそ得られる気

「授業では分かるけれど、自力では問題が解けない」

付きを大切にしない」とアドバイスしてくださいました。当初はピンときませんが、私は、この言葉の意味をすぐに知ることになります。

私は授業進度が遅れないよう配慮しながら、分かりやすい授業を心掛けた。実際、生徒の表情は理解しているように見えました。ところが、確認テストや定期試験の成績は低迷。自己評価を見ると、「授業では分かるけれど、自力では問題が解けない」という生徒がいることが分かりました。分かりやすいだけの授業では、進学校の生徒を学習に向かわせられない。私は、そう痛感しました。そして、自分が前任校での指導から切り替えきれいなかったことに思い至ったのです。



ひらやま・なるき ◎教職歴13年。同校に赴任して7年目。担当教科は数学。3年生担任。
広島県立尾道北高校 ◎全日制/総合学科/共学。
11年度入試では、国公立大は、北海道大、東北大、東京大、名古屋大、京都大、広島大などに計163人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、早稲田大、同志社大などに延べ313人が合格。

そして、これからも挑み続ける目標

「分からない」と感じさせる授業

進学校の生徒を学びに向かわせる指導とはどういうものか。この課題の答えを求めて、先輩の先生方の授業を見学しました。どの授業からも、生徒に考えさせる工夫を感じました。進路多様校では「分かる」という感覚が生徒の心を動かしませんが、進学校では生徒に「分からない」と疑問を感じさせることも、「もっと学びたい」という気持ちを生むためには必要なのです。そうした授業を行うには、生徒の志望実現に必要な学力を教師が正確に把握し、そこから逆算して日々指導する必要があると、私は、入試問題と教材

の研究を重ねました。

進学校にふさわしい難度の授業を模索する過程で、進学校の生徒は分からないことを隠そうとすることが多いことも見えてきました。つまり、生徒の「モニタリング（観察）」こそが重要であり、今まで以上に校内の試験や模試の結果に注意して目を通し、生徒一人ひとりがどこでつまづいているかを分析する必要があると気付いたので、指導を見直していった結果、生徒の成績は向上しましたが、「単に解法を覚える」「すぐに答えを求めろ」といった姿勢で学習する生徒の存在が気掛かりでした。そして、そういう生徒たちの多くは受験で結果を残せませんで

した。志望を実現したのは、試行錯誤しながら一問一問にじっくり取り組んでいた生徒だったのです。解いたことがない問題に向き合う力を付けたことが結果につながったのだと思います。考える訓練を積み重ねれば、難関大の入試問題には対応できないことを思い知らされました。「進学校の授業」を意識するあまり、いつの間にか私の指導は、生徒に考えさせることよりも、単に点を取るための効率的な学習を重視するようになっていたのです。

「授業者」である前に「学習者」として

私はもう一度、自分の指導を改めました。授業中、生徒が問題にじっくりと向き合う時間を設け、様々な道筋か

らアプローチを重ね、解答を導く力、つまり考える力を身に付けさせようとしています。そうしてこそ、数学の面白さの本質は伝えられるのです。最近「学校としてどういう力を付けさせたいのか」ということも重要な視点だと感じています。社会に出れば必ず直面する「簡単には答えを出せない問題」や「答えのない問題」に立ち向かう力を育む。それが尾道北高校の教師の使命であると気付いたので、

生徒が何を求めているかを把握し、教師がどんな力を付けさせたいかを明確にすることで、涵養すべき力である「ゴール」が見えるのです。「授業者」である前に一人の「学習者」として、生徒と共に学んでいこうと思います。

考える訓練を積み重ねる使命に気付いた

平山先生 の 授業実践



Q&A

Q 生徒に考えさせるために、課題をどう工夫していますか？

A 課題として週1~2回出す既習範囲の演習プリントを授業で活用します。演習プリントは私が添削・採点して各自に返却しますが、その際、よく考えられている解答やユニークな解き方をしている解答など、他の生徒の参考になりそうなものを、正解・不正解に関係なく別のプリントにまとめ、一緒に配付するのです。

分からないことを隠そうとするということは、周囲の目を非常に気にすることです。その分、クラスメートの解き方にも興味を示すだろうと考えました。結果として、どの生徒もプリントを食い入るように見て、自分の解き方と比較しています。自分の考えを深めることにつながると期待しています。

Q 3年間を通じて自ら学ぶ力を育むために、年次によってどのように指導を工夫していますか？

A 年次が上がるにつれ、生徒の学習の自由度を高めています。徐々に学習計画を自分で立てられるようにすることが狙いです。

1年次は毎回の授業で期限を設けて課題や小テストを出し、理解が不十分だと感じる生徒には追試を行います。2年次は、苦手だと思う分野を自分で選んで問題演習をさせるなど、選択する幅を設けます。3年次は更にその幅を広げ、希望者に個別指導を行います。ただし3年次でも、自立的な学習に課題がある生徒には、範囲を指定して問題演習を課しています。

メッセージをお寄せください

◎更なる授業力の向上を目指す平山成樹先生へメッセージをお願いします。同じ課題を抱えている同世代の先生の共感の言葉、独自の授業スタイルを確立された先輩からの応援やアドバイスなどを自由にお寄せください。編集部より、平山先生へお届けします。

下記のe-mailアドレスにメッセージを送信ください

view21_since-1975@mail.benesse.co.jp

2年生2学期、「中間層」に前を向かせるための意識付け

時期の特徴

生徒ごとの「差」が顕在化する時期。進路が実現できるのか不安を感じて苦手科目を「捨てる」といった諦めの気持ちに陥る生徒が出始める。

指導のポイント

夏休みに計画通りの学習が出来ず焦りを感じ、希望進路も漠然としている生徒を中間層と定め、クラスの大半を占めるそれらの生徒を引き上げる手立てを具体化する。

※このコーナーは、高校の先生方との検討会を経て制作しております。

目的別データ活用

1 中間層に位置する生徒を把握する

……→ 図1

◎部活動や課外活動の中心となり、一見充実した日々を送る2年生だが、実際は大半の生徒が夏休みに思った通りの学習が出来ず、志望校も漠然としており、焦りを感じている状態だ。この状態のままにしていると、部活動を辞めたり、苦手科目を「捨てる」と諦めの心理になりがちだ。図1のアンケートによって、目に見える学力とは異なる指標でどの生徒が中間層に位置するのかを把握し、教師の手立てが必要なそれらの生徒をこの時期の中間層と定め、指導を行う。

2 生徒の「得意」を活用し、中間層に前を向かせる

……→ 図2

◎この時期、焦りを感じている生徒には、自己肯定感をバネにした指導が重要だ。生徒の「得意」を把握することで、心の支えを作りたい。そこで、図2の「得意」把握シートでまず生徒自身に得意だと感じることを記入させる。その後、担任が見た生徒像を記入し、生徒が気付いていない長所も漏らさずに言語化する。更に、進路志望検討会などの場を利用して、教科担任など複数の教師の目で生徒自身が気付かない得意分野を探っていく。学年団が生徒一人ひとりを下支えしていくことで、個々の生徒が前向きになり、3年生に向けて「団体戦」の雰囲気がつくられる。

対教師へのデータ

夏休み明けの焦りや危機感、「得意意識」などを個別に把握する

データを用いた指導の流れ

STEP 1

◎図1を用いて、各生徒のモチベーションを把握する。焦りや危機感を巻き返しの意欲と捉える

STEP 2

◎生徒の「得意」を図2で把握する。生徒の記述だけでなく、担任や教科担当が気付いた生徒の特長も記入する

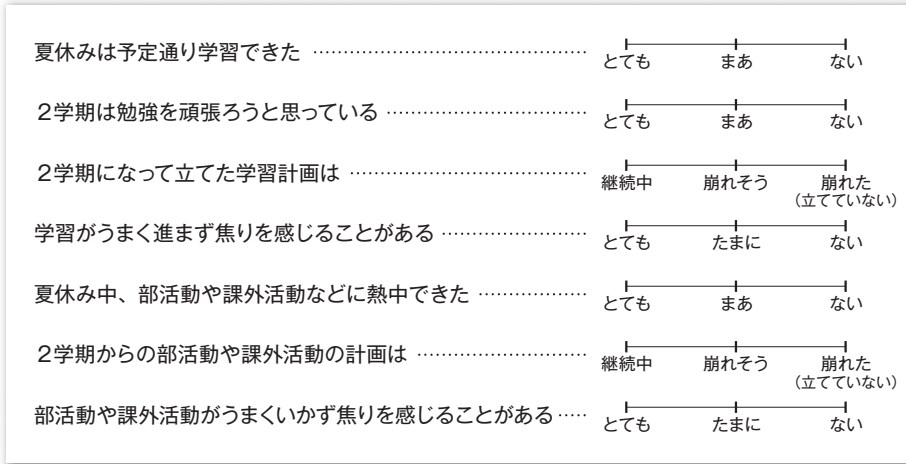
STEP 3

◎進路志望検討会などにおいて複数の目で生徒を分析し、得意なことを生かした具体的な指導について話し合う

STEP 4

◎「得意」を意識した声掛けで生徒の意欲を高め、学習、生活に対して前向きな気持ちにする

図1 生徒のモチベーションを測るアンケート



上位層 モチベーションが高く、夏休み中も継続して学習や部活動が出来た生徒。

中間層 学習や部活動でうまくいかないことがあり、焦りを感じる事が出来る（まだ諦めてない）生徒。

下位層 モチベーションが低く、学習や部活動への取り組みが停滞し、それに対して焦りも感じていない（自分自身を否定的に捉え始めた）生徒。

図2 焦りを前向きな力に転換する生徒の「得意」把握シート

2年()組()番/名前()		こちら側は記入しないこと (担任記述欄)
学習について	<ul style="list-style-type: none"> 勉強していて楽しい科目 英語 今後、一番成績が伸ばせそうな科目 成績が落ちることがなさそうな科目 	<p>・学年の中で英語の成績は中位だが、予習は手を振らずに行っている。</p> <p>・毎授業の単語テストではほぼ満点</p> <p>・長文を読む訓練を積み重ねれば更に伸びる!</p>
	<ul style="list-style-type: none"> 部活動や課外活動で楽しんでいること 家に帰って、一番楽しいと思える時間は何をしているとき? 家に帰って、一番落ち着く時間は何をしているとき? 	
	<p>こちら側のスペースは、生徒から回収した後、担任が気付いたこと（生徒の自己分析とは異なる担任の評価など）を記入する。また、部活動顧問や教科担当にも意見を求め、記入し、面談や声かけに生かす。</p>	



このマークのある図版は、加工可能なデータとして、小誌ウェブサイトからダウンロードできます。
<http://benesse.jp/berd/> → HOME > 情報誌ライブラリ (高校向け) > 生徒指導・進路指導ツール集

現場からのアドバイス (プラスαの指導)

**パターン化しない
進路への深い理解が大切**

「数学が出来るので国公立理系」「理科が苦手なので私立文系」といった、パターン化された進路選択に生徒がとどまらないように気を付けたい。教師、生徒共に、このような単純なパターン化で進路を決めがちだが、「出来る、出来ない」ではなく、あくまで重要なのは「何をしたいか」である。現状の成績にとらわれ過ぎず、まずは自分の目標を語れるように指導する。

**様々な視点を投げ掛けて
「得意」を掘り下げる**

学習に対する諦めが強く、モチベーションがなかなか上がらない生徒もいる。そのような生徒には面談で「どの科目の授業が一番眠くならないか」「眠い中、それでも家で教科書を開くならどの科目か」など得意なことに関する質問のハードルを下げてみる。どの生徒にも必ず支えとなる「得意」があると信じて生徒の言葉を引き出し、それを伸ばしていくための個別指導が重要だ。

**複数の手段で
生徒情報を広く集める**

一人の生徒を多角的に評価する進路志望検討会では、出来るだけ多くの教師による生徒分析が行われることが望ましい。そこで、学年にかかわる全教員に用紙を渡し、授業への集中力が高まっている生徒や成績が伸びつつある生徒など、授業で気が付いたことを、とくにプラスの観点から書いてもらう。回収した用紙は検討会で共有し、欠席した教師には後日回覧する。

目的別データ活用

1 部活動での 一体感を活用し 学習時間、学力を 引き上げる

……→ 図3

◎中間層の中には、部活動には熱心に取り組むが学習に気持ちが向いていない生徒も多い。顧問の協力を得て、部活動を活用したモチベーションの引き上げを図りたい。図3を利用して、それぞれの部の2年生に、学年目標としている学習時間を達成するための週間計画を立てさせる。普段から共通の目標で頑張る仲間と、学習面でも同じ目標を掲げさせることで、生徒を前向きにさせたい。学習時間だけでなく、模試成績で共通の目標を立てたり、顧問や部長からの応援の言葉を書き込んだりし、皆で一緒に頑張る雰囲気を大切にする。

2 検討会の議論を 生徒・保護者に フィードバック

……→ 図4

◎各生徒の進路観を醸成し、学習意欲を高めるため、保護者との対話も促していく。だがこの時期に、「進路について家で話し合ってください」と漠然と呼び掛けても、対話はなかなか生まれない。これまでの面談や図2、進路志望検討会などで得られた生徒情報を基に「担任の私はキミの志望をこう理解しているが相違ないか」と出来るだけ具体的に提示する。生徒や保護者にとって担任による生徒への理解は信頼感につながり、仮に担任の理解と生徒の志望に齟齬があっても、それは生徒と保護者、担任が話し合っていく「スタート」として機能する。

対生徒
への
データ

友人や保護者との対話から
モチベーションを高める

データ活用の流れ

STEP 1	STEP 2	STEP 3	STEP 4
◎学年団で部活動と保護者を巻き込んだ意欲の底上げの重要性を確認する	◎部活動顧問に呼び掛けて、部活動と学習を両立する学年団の形成を目指す。各部活動単位で学習計画の目標を立案させる(図3)	◎3者面談の前に生徒・保護者に対して進路面で検討しておいて欲しい事項を示す(図4)	◎図3の学習計画の達成状況と図4の面談事前準備シートを基に、3者面談を行う

今回のテーマと関連する過去のバックナンバーも併せてご活用ください！ 右のウェブサイトでご覧いただけます。

- 2006年9月号
- 「2年生の夏休み明けの意識付け」
- 2008年9月号
- 「2年生夏休み明けの意識付け」
- 2010年9月号
- 「2年生夏休み後の切り替えと秋からの進路意識の醸成」

Benesse® 教育研究開発センター

<http://benesse.jp/berd/>

生きたデータの徹底活用 クリック!

HOME→情報誌ライブラリ(高校向け)→
生徒指導・進路指導ツール集でご覧ください

加工可能な資料が
ダウンロードできます!

生徒指導・
進路指導
ツール集

ウェブサイトで
ダウンロード!

図3 部活動ごとの学習時間計画表

■部活動と学習の時間を記入しましょう

部活動名

記入例	5:00	7:00	1限	2限	3限	4限	昼休	5限	6限	17:00	19:00	21:00	23:00	学習時間計
		学習 1h								部活動 1.5h	学習 2h		学習 1h	4 h
月 /														h
火 /														h

1週間の学習時間の合計 → 目標 h

■上記の目標をみんなで達成するための決意を書こう

■顧問の先生からの応援メッセージ

図4 保護者に対する面談事前準備シート

■面談の前に次の内容について、まず自分で考えて、そして保護者の方と相談しましょう。その上で面談に臨んでください。

第一志望は東京工業大で変更ありませんか？東京工業大だけならば、センター試験は第一段階選抜のみで使われ、合否の判定には含まれないので国・地歴公民はそれほど重要ではありません。ただし、東京農工大まで視野に入れるとセンターの点数も合否の判定に含まれるので国・地歴公民も重要になります。出願校について考えてください。

2年()組()番/名前() 保護者署名()



このマークのある図版は、加工可能なデータとして、小誌ウェブサイトからダウンロードできます。
<http://benesse.jp/berd/> → HOME > 情報誌ライブラリ (高校向け) > 生徒指導・進路指導ツール集

現場からのアドバイス〈プラスαの指導〉

ストップウォッチで隙間時間の重要性を体感

部活動で学習計画を立てさせた際には、その計画を実現するための工夫や考え方も併せて紹介し、生徒をサポートしたい。例えば「学習時間は週単位で考え、勉強できない日があれば、他の日でまかなう」などが考えられる。更に、通学中や休み時間など、いわゆる隙間時間の学習もストップウォッチで計測し、カウントする。ゲーム感覚で、隙間時間の積み重ねが体感できる。

誤答が多い模試問題を定期テストに組み込む

2学期の学習計画上、11月の模試は重要だ。これに向けて7月の模試の復習をしながら、基礎を固めさせることになる。模試の復習への意欲を高める一つの手法として、誤答が多かった模試の問題を、定期テストで出題することが考えられる。模試を見直す習慣が付いていない層にはとくに有効だろう。また、模試の見直しノートについても、見本を見せながら再度説明したい。

行事の後の切り替えを徹底する

2年生2学期の学校行事は、生徒にとって高校生活の質を左右する重要なイベントばかりだ。行事中はその他のことを忘れて思う存分楽しむべきだが、その後は速やかに切り替えさせたい。行事が終わった直後の遅刻や私語には厳しく指導し、「次の目標に切り替えられないようでは、当校の生徒とは言えない」など、高校生として「あるべき意識」を持たせる。

キノコを分類して特徴を把握し 酵素などを新技術に生かす

鳥取大 農学部附属 菌類きのこ遺伝資源研究センター

菌類は、地球上に150万種以上あると推定される。古来、人間は菌類の豊富な酵素や代謝産物を生活に取り入れてきた。しかし、現時点で存在が確認されている菌類は約10万種であり、推定値の1割にも満たない。菌類の持つ資源について、人間はほんの一握りの知識しか持ち得ていないのだ。菌類分類学を専門とする前川二太郎教授は、菌類の中でもキノコを分類し、キノコの優れた性質を用いて新たな技術をつくり出す道を追究している。キノコが秘めた可能性について、お話をうかがった。

フローチャートで分かる菌類分類学

大学院生の 主な出身分野

農学

理学

など

◎理学の中でも、生物と環境の相互作用を扱う生態学や、生物をそれぞれの特徴によって分類し、体系化する分類学を専攻した学生が多い。

研究にかかわる 学問分野と研究内容



◎把握したキノコの特長を生かした製品・技術を開発するために、さまざまな分野の学問とかかわる。生態学は環境保全、薬学は医療品開発、植物病理学は植物の病気の原因解明と防止、林産学は食用キノコの栽培などに菌類を応用している。分子生物学はキノコ種の系統関係を解析する。

研究成果と 社会のかかわり

キノコの分類

キノコ資源の活用

遺伝資源の保存

など

◎キノコを遺伝子や作り出す酵素などの諸特徴から分析し、共通性によって複数のグループに分類。把握した特徴をさまざまな分野で活用し、研究成果の社会還元を図る。保存している遺伝資源（菌糸体）を提供し、実用化を促進する。

多くの謎に挑戦する面白さを感じてほしい

菌類分類学が求める学生像

新しい方法を考え、試そうとする姿勢

失敗を恐れないチャレンジ精神

諦めずに努力する根気

DNA研究の進歩によって、今までの菌類分類学の成果は大きく揺らいでいます。定説が覆されたこともあるほどです。正直に言って私たち研究者にも、「これが正しい」と断言できることはほとんどありません。DNAによる分類が定説となぜ違うのか、本当はどう分類すべきなのかは、改めて研究しなければ分からないのです。従来学説を全て検証し直す必要があると言っても過言ではないでしょう。そのため、たとえ初歩的な実験であっても軽視せず、新たな工夫を凝らす姿勢が求められます。

方法が変われば、実験結果を予測することは簡単ではなく、失敗が続くこともあるはずです。しかし、諦めてしまえば、真の分類系統に迫ることは出来ません。自分で根気よく結果を分析するのはもちろん、研究仲間の意見にも耳を傾け、いかに失敗からヒントをつかむかが重要です。

分からないことが増えた分、自分が解明できる謎も多くなったと捉え、自ら考えて工夫する面白さを感じてほしいと願っています。

高校生へのメッセージ

高校時代にしっかり勉強してこそ、大学での学びは豊かになります。受験突破だけを意識していたのでは、入学後の学習のモチベーションは保ちにくいと思います。自分が大学で「何を学びたいか」を見据えましょう。また、研究にはチームワークが不可欠。部活動などで多くの人と接し、コミュニケーション能力を磨くことも大切です。



前川 一太郎

教授 Takahara Mataro

鳥取大農学部附属菌類学のご遺伝資源研究センター教授。鳥取大農学部卒業、鳥取大大学院農学研究科修士課程修了。農学博士。財団法人日本のこセンター菌草(きんじょん)研究所主任研究員などを経て、2005年度より現職。「コウヤクタケ科の分類学的研究」により、1993年度日本菌学会奨励賞を受賞。主な著書に「日本のきのこ」(分担執筆、山と溪谷社)、「世界のきのこ図鑑」(監修、新樹社)など。

研究概要

キノコの多様性を解明し社会に還元する

人間は、昔から

生活の至るところで菌類を活用してきました。チーズ

や味噌などの発酵

食品、抗生物質を

はじめとする医療

品など菌類の仲間

であるカビや酵母から作られたものを見れば、菌類で我々の生活がいかに豊かになったかが分かるでしょう。

ところが、動物や植物に比べて菌

類の研究はあまり進んでいません。

菌類は少なくとも150万種以上あ

ると推定されますが、現在確認され

ているのはそのわずか7%程度。つ

まり、菌類にはまだまだ未知の可能

性が秘められているのです。

私の研究対象は、目に見える大き

さの子実体を形成する菌類、いわゆ

るキノコです。国内だけでなく、研

究が進んでいるヨーロッパの学者も

まだあまり調査をしていないアジア

や南米各国から採集しています。キ

ノコの形態はさまざま、柄とカサ

があるという一般的なイメージから

かけ離れたものも多くあります。ま

た、樹木や落ち葉だけでなく、動物

の死骸や排泄物などに生えるものがあります。そして、形や発生場所が似ていても、種類によって酵素などの生成物質は大きく異なります。

研究内容は大きく二つに分けられ

ます。一つめは、採集した多種多様

なキノコを分類学的に整理し、それ

ぞれの生態的特徴を把握することで

です。同じ特徴を持つキノコをまとめ

ることで、どの酵素がどういふ働き

をしているのかを突き止めることに

つながります。最近ではDNAによる

分類が飛躍的に進みましたが、従来

の学説との対立があるため、実験を

重ねてどちらが正しいかを裏付けて

いかなければなりません。

採集したキノコは、遺伝資源(菌

糸体)を試験管に入れて凍結保存し

ます。実験などの必要に応じて解凍

し使用できるため、研究を進める上

で大きな武器となるのです。本セン

ターは、遺伝資源を用いて基礎から

応用まで多様な研究を行う国内唯一

の機関であり、日本で確認されてい

るキノコの3分の1に当たる約千種

の遺伝資源を保有しています。

研究内容の二つめは、キノコが持

つ優れた性質の活用です。これまで



写真 発生初期のタマゴタケ。テングタケ属の一種。カサは鮮やかな紅色で毒々しいものの、菌切れが良く美味しい

に取得した特許は十数件に及び、実用化に向けても動いています。

例えば、エリンギを栽培した後の菌床にはキユウリの炭そ病を抑える効果があることが分かっています。これを再利用することで、化学農薬に頼らずにキユウリを栽培できるようになるかもしれないのです。

またシヨウロは、松の生育を促進する作用を持っています。鳥取砂丘のクロマツ林には枯れ木が増えていますが、シヨウロを共生させたクロマツを植林することによって、海岸線の景観を保てます。技術的に難しいシヨウロの人工栽培への道を開くことにもつながります。

研究室ではキノコの機能を調べた

研究を志したきっかけ

未知のキノコを自分で解明する 興奮に胸が躍った

り、培養的性質を把握したりすることは出来ませんが、その成果を社会に還元するには、学外の研究機関や企業との連携が欠かせません。機能を活用して実用化しようと、本センターの大きな特徴である遺伝資源を外部に貸し出すことも検討しています。

私が育った家には家庭菜園があり、子どもの頃から植物の世話をするのが好きでした。農学部を選んだのは、そのためです。入学後、最も興味を

引かれた講義は植物病理学で、大学院でも植物の病気の主因である病原菌の生産する毒素についての研究を行いました。植物病原菌も、大半のキノコと同じ菌類に分類されるため、現在の研究と無縁ではありませんが、当時の私は漠然と菌類の研究を続けたいと考えていただけでした。

キノコに強い関心を持ったのは、1980年代初め、鳥取県内の小さな研究所に勤めるようになってからです。研究所でシイタケを栽培するためのほだ木に、見たことのない、

カビのような形のキノコがびっしり生えていました。先輩の指示を受けて私が調べたところ、それはコウヤクタケ類というキノコの仲間であり、分類がほとんど分かっていないことを知りました。未知のキノコの分類を自分の手で明らかに出来るかもしれない。そんな興奮に胸が躍ったことをよく覚えています。

それから約30年の間に、私だけでなく、国内外の研究者によって、コウヤクタケ類の研究は随分進みました。かつては分類学上で単一の「科」として扱われていましたが、今では「科」の上位階級である「目」にも渡ることが分かっています。日本のコウヤクタケ類も300種近く確認され、当時発見されていたものから4倍以上に増えました。もともと少なくともまだ200種以上あると推定されています。

退職するまでに全てのコウヤクタケ類をこの目で確かめ、分類学的に正しく位置付けたいと思っています。そこまでの道のりは平たんではありませんが、だからこそ面白い。未知に挑む過程にこそ、研究のだいご味があると感じています。

用語解説

1 子実体

胞子を作る器官。菌類の種類によって、子実体の大きさや構造は異なる。

2 菌糸体

細長い細胞が連なる糸状の菌糸が、一定の条件の下で枝分かれと結合を繰り返して繁殖したもの。菌糸体を保存しておけば、実験の必要に応じてキノコを作り出すことが出来る。

3 菌床

おがくずに水と、米ぬかなどの栄養素を入れて混ぜたもの。pHを調整し、殺菌した上で冷却し、菌糸体を植え付ける。

4 炭そ病

葉や茎、果実に発生する病気で、葉には褐色で円形の斑点が現れる。

5 ほだ木

野生に近い形でキノコを栽培するために、伐採した切り株に菌を直接付けて、一定の長さに切断した木。

6 科

生物分類学上の階級の一つ。「目」の下、「属」の上に位置する。例えばマツタケは、「ハラタケ目・キシメジ科・キシメジ属」に属する。

DNAによる分類を電子顕微鏡で問い直す



彌永このみさん
Yanaga Konomi

鳥取大大学院
農学研究科生命資源科学専攻
博士前期課程2年
(兵庫県私立・親和女子中学・高校卒業)

農学部に入った頃はキノコの栽培に関心がありましたが、キノコが正確に分類されていてこそ、的確な栽培が出来ることを学び、菌類分類学の研究を志しました。

Q 現在の研究内容を教えてください

A 「アンズタケ目」に属するキノコを研究しています。アンズタケは、ヨーロッパでは料理によく使われるキノコで、研究も進んでいます。しかし日本ではあまり食べられないため、全国の雑木林に生えているながら、研究が進んでいません。「アンズタケ目」という分類も、ヨーロッパの研究者がDNAを基に行いました。私は電子顕微鏡を使って、この分類を検証しています。日本中から「アンズタケ目」のキノコを集め、菌糸の細胞に共通性があるかどうかを確かめるのです。

電子顕微鏡は何万分の1というミクロの世界を鮮やかに映してくれますが、それだけに、ごまかしは全く利きません。組織の切り方、試薬の入れ方など、サンプルを作成する一つひとつの段階に細心の注意が必要です。菌類の系統関係を調べる研究

では、この20年ほどほとんど用いられていませんでした。だからこそ、今までになかった研究結果を得られそうだという手応えを感じています。DNAとしては一つの「目」であつても、細胞の構造からは更なる分類が可能ではないか。そうした仮説も立てています。

また「アンズタケ目」には、芝を枯らす酵素を出すキノコがあることも分かっています。何種類あるかはまだ不明であるため、今後も研究を進め、特定したいと考えています。

Q 高校生へのメッセージをお願いします

A 好きなことであれば、たとえ辛くても乗り越えられると思います。決して几帳面ではない私

が、手順が煩雑な電子顕微鏡を使い続けられているのも、「大好きなキノコについて、もつと詳しく知りたい」という気持ちがあるからです。最初は確かに準備が大変だったものの、今はむしろ、入念な準備に見合った結果が得られることを頼もしく感じるようになりました。

皆さんにも、面白いと感じることをたくさん見つけてほしいと思います。「何が面白いかわからない」という人には、一つ提案があります。笑った話題や興味を持って聞いた話題を手帳にメモしてみませんか。私は高校時代、毎日していました。自分がどんな話題に心を動かされているかが一目で分かり、興味の幅を広げるのにとっても役立ちましたよ。

Q なぜこの分野に進んだのですか

A 子どもの頃、アニメ「風の谷のナウシカ」が大好きでした。物語の重要な役割を担う菌類にも興味湧き、図鑑を読むようになりました。身の回りに菌類があふれていることを知った時も驚きましたが、シメジやマイタケといった好物のキノコが菌類の仲間だと知った時はまさに衝撃でした。いつしか私は、「キノコを究めたい」と思うようになっていたのです。

私の高校時代

実験の失敗から貴重な教訓を得られた

●高校時代は、生物部に所属していました。2年生の頃、友だちと2人で菌の培養実験をしたことがあります。複数のシャーレに培地を作って、学校の食堂やトイレなど数カ所から採ったサンプルを入れました。翌日、シャーレを開けたところ、「キャーッ!」と思わず悲鳴を上げてしまいました。その中には無数の菌が繁殖し、この世のものとは思えないほどグロテスクな光景が広がっていたのです。友だちは半泣きでしたが、私も二度とそのシャーレを開ける気にはなれませんでした。

失敗の原因は、準備不足です。サンプルを入れる際、不用意にシャーレを開けたため、空中のさまざまな菌と一緒に入ってしまったのでしょう。培地の滅菌も不十分だったのだと思います。しっかりと準備をしないと、大変なことになる。この教訓を得られたため、大学に入ってからの実験準備は少しも苦になりませんでした。

新課程における カリキュラム編成の考え方

— 2013年度の全面実施に向けて〈PART 2〉 —

4月号に続き、各校での実態を踏まえたカリキュラム編成の考え方を紹介する。
今号では、県下有数の進学校である山形県立米沢興譲館高校と、
県内で最初の連携型中高一貫教育の実践高校である静岡県立川根高校に、
カリキュラム決定までの過程と共に、今後の運用面での課題を聞いた。

山形県立米沢興譲館高校のカリキュラム

現 状

- 県内屈指の進学校。生徒のほとんどが国公立大を志望
- 2003年の現行課程導入時、SIを徹底的に議論
- 授業時数は55分×6コマ(水曜のみ7コマ)

カリキュラム編成方針

- 大学入試だけを目標としない全人教育を軸とする
- 55分×6コマから50分×7コマに変更して、週4コマ増やす
- 行事を精選し、授業時間を捻出

カリキュラム編成上の 特徴

- 全体の「器」を広げたため、コマ数減の科目なし
- 国・地歴公民・数・理・英のいずれもコマ数増。特に、文系では国語や地歴公民を、理系では数学や理科を増やした
- 「芸術」「家庭」「情報」は1年生で集中的に履修

運用面での工夫と課題

- 言語活動の教科指導上での実践
- 教職員の会議の効率化

教育委員会への新課程カリキュラム提出に向け、多くの学校で策定の大詰めを迎えているのではないだろうか。今後、課題となるのはカリキュラムの運用面だ。授業時間の枠内で本当に学習内容を教

静岡県立川根高校のカリキュラム

現 状

- 山間部に位置する連携型中高一貫教育の実践高校。生徒の学力差が広い
- 特進クラスは週35コマ、普通クラスは週30コマと授業時数に差がある
- 生徒の多様な進路に合わせたメニュー設定に限界が生じる

カリキュラム編成方針

- 高校3年間を通じて、コミュニケーション力など社会を生き抜く力を付けさせる
- 生徒のニーズに合わせた「多様性」から「共通性」重視へ転換を図る
- 生徒の学力の変化や学力差の拡大を想定し、カリキュラムに幅を持たせる

カリキュラム編成上の特徴

- 特進クラスと普通クラスの授業時数を統一し、1日6コマとする
- 協同的な学習などを通じて、知識を活用する授業を意識する

運用面での工夫と課題

- 出口重視の指導から中学生の実態把握など、入り口重視の指導を模索
- 若手教師を中心に、授業研究により授業力向上を図る

え切れるのか、活用型の授業や言語活動にどう取り組めば良いのかなど、多くの課題がある。完成したカリキュラムをどう運用していくか。2校の考えを紹介する。

自校のS Iに応じた、カリキュラムを編成・運用

山形県立米沢興譲館高校

現行課程移行期の議論を踏まえ
主要教科をバランスよく増やす

七つの議題から
学校のビジョンを検討

2010年7月、山形県立米沢興譲館高校は新課程に向けて、教務主任や進路指導主事、生徒指導主事らから成る「新ビジョン委員会」を立ち上げた。「新」が付くのは、03年の現行課程への移行時に「ビジョン委員会」を発足させて学校のアイデンティティーを議論した経緯があるからだ。

新委員会の議題は、①学校が目指すもの、②進路指導体制の在り方、③理数科の在り方、④週当たりの授業時数や1コマの時間、⑤学校行事の見直し、⑥土日の活用、⑦部活動の在り方である。た



山形県立米沢興譲館高校
海和雅人
Kaiwa Masato
教職歴24年。同校に赴任して15年目。教務主任。



山形県立米沢興譲館高校
高橋正憲
Takahashi Masanori
教職歴19年。同校に赴任して8年目。進路指導主事。

学校プロフィール◎1697年設立の藩校から300年以上の歴史を持つ伝統校。「己を磨き、誠を尽くす」などの興譲の精神を受け継ぐ。誠形態◎全日制／普通科・理数科／共学／1学年約200人
11年度入試実績（現役のみ）◎国公立大には延べ121人が合格。私立大には延べ146人が合格。

だし、①③は新委員会では議論に時間を割かないことにした。その理由を教務主任の海和雅人先生は、次のように話す。

「私は旧委員会のメンバーでもありました。当時、この三つに関

静岡県立川根高校

多様なメニュー設定から
「共通性」重視へ転換

地域唯一の高校として
社会を生き抜く力を育む

南アルプスの南麓、大井川の清流に位置する静岡県立川根高校は、川根本町と島田市北部から成る川根地区唯一の高校だ。地域に塾はなく、大半の生徒は中学・高校時代を通じて塾や予備校に通うことはない。地域からは「川根高校が無くなると地域が衰退する」との声も聞かれるほど、同校の教育活動への期待は大きい。

同地区にある三つの中学校とは連携型の中高一貫教育を行う。3校から同校に入学する生徒は合計約6割。同校の生徒で3校の出身者が占める割合は97%以上だ。



静岡県立川根高校副校長
浅川典善
Asakawa Fumiyoshi
教職歴30年。同校に赴任して2年目。

学校プロフィール◎1963年、自宅から高校への通学が地理的に困難だった地域の強い要望を受け、藤枝東高校の分校として開校。地元の三つの中学校と連携型の中高一貫教育を展開。形態◎全日制／普通科／共学／1学年約70人
11年度の進路実績（現浪計）◎4年制大37人（うち国公立大6人）が合格。短大8人、専門学校13人就職13人。

必然的に入学者の学力の幅は広い。2007年度には「特進クラス」を設けて大学進学指導体制を強化したこともあり、ここ数年で4年制大進学者数が増え、学年の半数にまで達した。この他、専門学校が2〜3割、就職が約2割といった状況だ。

こうした多様な学力と進路意識

としては徹底的に議論して、固めたという経緯があります。当時の結論を堅持するという前提で、新委員会の議論を行いました」

新委員会で約3か月間議論した末、カリキュラムの枠組みが決まった。まず、④授業時数は、現行の55分授業6コマ（水曜のみ7コマ）の週31コマから、50分授業7コマの週35コマとした。

「新課程では特に理科の単位数が増えるため、カリキュラムそのものの『器』を大きくしなければならぬ」という結論になりました」（海和先生）

⑤学校行事については、現行課程導入時に精選していたが、更に見直すことにした。担当の教師が1990年度～2010年度の行事を全て洗い出し、一覧表を作成して検討。その結果、2日間かけて行っていた体育祭の時間を削減して2コマ分の授業を入れるなど、同校のカラーを失わないように配慮しつつ行事を縮小した。

⑥土日の活用では、2年生までは補習などを行わずに、部活動などに専念させることにした。

⑦部活動は、1日が7コマになることで放課後の練習開始が遅くなるが、終了時刻は従来のままにした。限られた時間の中でいかに効果的に練習するかを、生徒に課した形となる。

全体の「器」を広げ、 コマ数減の教科を出さない

新委員会の方針を土台に、10年11月からは「教育課程検討委員会」を立ち上げ、具体的なカリキュラムの検討に入った。

策定手順には二つの特徴がある。一つは、先に13年度のカリキュラムを策定し、12年度のカリキュラムはそれを反映させて作成したこと。もう一つは、全ての教師がSIを理解した上で各教科に要望を聞き、叩き台を作ってから会議に諮る作業を繰り返したことだ。「会議で各教科の要望を聞いても、議論の收拾がつかなくなる可能性がありました。そこで、素案を提示してから意見を聞くという方法にしました」（海和先生）

その結果、11年1月にはカリキュラムが完成。コマ数を増やし

を持つ生徒たちを全員、無事に卒業させ、どのような道に進んでも社会で生き抜いていく力を付けさせること。これが同校の使命であると共に、カリキュラム編成の基本方針ともなった。

「学士力」につながる 共通の基礎学力を意識

同校が掲げた方針は二つある。一つは「メニューの多様化」から「共通性重視」への転換だ。浅川典善副校長は次のように説明する。

「本校は、これまで生徒の多様な希望進路に合うようなカリキュラムを組んでいましたが、カリキュラムを多様化させればさせるほど、生徒の学力も多様化してしまふという課題もありました。まだ10代の生徒が進路や科目を決定するのは本来的には難しいことで、安易な選択をしがちです。多様化が限界に來ていると考え、先生方に新課程を機に共通性を高め、いくことを意識してもらいました。この多様性から共通性への流れは、新課程の精神とも足並みをそろえるものです。新課程では、

国語総合と数学Ⅰ、コミュニケーション英語Ⅰの3科目が共通必修科目となりました。これは、どの生徒にも必要な基礎学力を明確に示したと言えます。大学の学士課程教育の見直しで話題になった『学士力』も、グローバルスタンダードの中の基礎学力と位置付けられると思います。三つの科目は学士力につながる共通性とも捉えられるのです」

同校は新課程のカリキュラムでは選択科目を精選し、国語、数学、英語の基礎的な科目を重視した。また、特進クラスは現在ゼロ時間目として50分の授業を毎日行い1日7コマとし、普通クラスはその時間帯に30分間の朝読書やドリル学習を行っている。12年度には全クラス1日6コマに統一し、放課後の活動を充実させ、家庭学習の時間も確保させたいと考えている。

知識の習得から活用へ 授業づくりも転換

二つめは「幅を持たせた編成」とすることだ。

「新課程では小・中学校で学習

た分は、国語・地歴公民・数学・理科・英語などに当て、その他の教科は現状維持とした。進路指導主事の高橋正憲先生は、「授業時数が削減される教科が無いので、大きな反対もなくカリキュラムが決まりました」と話す。

1年生で増やした4コマには、理科2コマ、英語1コマ、「芸術」1コマを当てた。「芸術」は、現行課程では1年生と2年生で各1単位だったが、1年生でまとめて2単位取得とした。「家庭」「情報」も1年生での履修と位置付けた。

普通科の文系・理系と理数科に分かれる2年生からは、文系では国語や地歴公民を、理系では数学や理科を増やした。理数科に学校設定科目として設けている「生涯科学」は1、2年生で履修させていたが、2、3年生に変更してより専門的な指導に重きを置くことにした。

言語活動の充実など 運用面を検討

カリキュラム編成は終了したが、運用面での課題は残る。その

一つは、言語活動の充実だ。数学担当の高橋先生は、「学級全体に向けて話し掛けても、自分のことだと受け止めない生徒が増えたと感じます。また、問題文が長いと、正しく意味を読み取れない生徒もいます。数学でも、計算や問題を解く技能だけでなく、言語活動を意識して教えていかなければならないと痛感しています」と話す。

物理担当の海和先生も、「物理の学力はかつて数学との相関が強いと考えていましたが、ここ数年、読み取る力との相関が強くなっていて感じています」と指摘する。朝読書として週1回10分間の「思索のとき」を設けているが、教科指導の中での更なる工夫が求められている。

また、職員会議は、授業時数が増えるため、時間の確保が難しくなる。海和先生は、「全体の職員会議と何人かの委員会的な会議の切り分けがこれまで以上に大切にされます」と話す。一人1台支給されているパソコンによる情報共有策なども検討し、効率的な運営を目指している。

内容が大幅に増えます。その結果、授業についていけない子どもが増え、本校への入学生の学力差が更に拡大する可能性があります。学力の変化が大きいと予測される教科・科目を中心に幅を持たせたカリキュラムを組み、生徒の実態に合わせて運用できるようにする予定です。また、中高の連携を更に活用すれば、入学者個々の学習課題を解決していくことも可能ではないかと考えています」

今回のカリキュラムの編成が終了した今、これまでの勤務校での経験も踏まえて浅川副校長は、今後の課題を次のようにまとめた。

「以前は3年生で受験に必要な科目を集約的に履修させたり、学校行事を秋から春に移したりと、出口の大学入試を考慮してカリキュラムを編成してきました。しかし、大学入試競争が緩和した今、本校のような学校では出口よりも入り口を重視したカリキュラム編成をすべきだと考えています」ただし、浅川副校長がカリキュラム編成以上に重要だと考えるのは、カリキュラムの「運用」だ。

「情報化社会の進行により、知識を個人が所有するのではなく、皆で共有しながらイノベーションを生み出す時代になりました。学校現場にデジタル端末が導入されれば、教師の知識以上のことを生徒がすぐに調べられます。そうすると、知識をいかに効率的に教え込むかという授業は通用しませんが新しい発想を生み出すような活用型の授業が求められます」

1年生の朝学習の時間ではこれまで漢字や計算のドリル学習をしていたが、考えなければ解けない手作りの問題を増やした。これには授業の振り返りも含まれており、多くの学校で課題となっている授業内容の定着を図るための家庭学習指導にもつながる。

教師が指導力を付けることが、新任や2校目の若手教師が多い同校にとって喫緊の課題だ。

「カリキュラムをいかに実行するか、授業の進め方が問われています。協同的な学習を取り入れながら、授業力と生徒の学力の向上を図っていききたいと思います」

学生が伸びる学び方

大学選択

新たな視点



今号の視点

学習意欲を高めよう

初年次から工夫する大学

入試を突破して入学したからといって、必ずしも学習に意欲的な学生ばかりではない。特に不本意入学生が多いと思われる中堅以下の大学では、学習意欲の向上は大きな課題だ。今号は、入学直後から、学習の動機付けに積極的にかかわる二つの大学を紹介する。

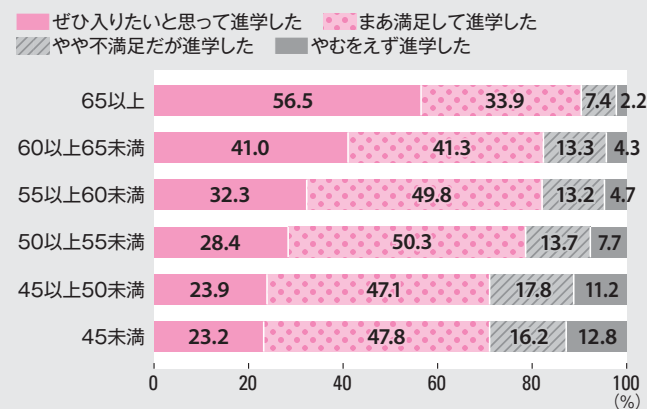
早い段階で 学びへの動機付けが必要

大学進学率が50%を超え、えり好みをしなければ大学に入学できる全入時代となった。高校生にとって大学入試だけでは学習への動機付けにはなりにくく、目的意識が明確な学生ばかりが大学に進学するわけではない。それは、「やや不満足だが進学した」「やむを得ず進学した」という学生が、どの入試難易度の大学にもある一定数いることから明らかだ(図1)。

大学にとって、初年次から学生に働き掛けてモチベーションを高め、いかに充実した大学4年間を送らせるかは大きな課題だ。ところが、1、2年生の間は、大学の進路支援体制を「判断できない」と答える学生が約2割存在し、その工夫が学生には届いていないようだ(図2)。

今号は、学生の意欲向上に取り組む中堅大の中でも、入学直後から学生に働き掛けて意欲を高め、それと同時に意欲を行動に移せるような支援体制を整えている大学に注目した。

図1 大学進学に対する意識 (入試難易度別)



*入試難易度は、在籍している大学名の回答があった2,614人(全体の64.2%)に対して、進研模試の入試難易度ランキングの偏差値を参考にして割り当てた。

図2 大学満足度：進路支援の体制 (学年別)

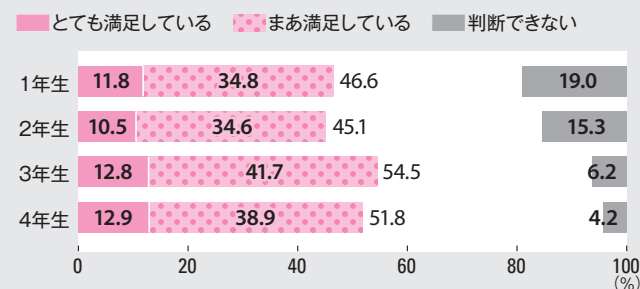


図1、2出典／Benesse教育研究開発センター「大学生の学習・生活実態調査」(2008年)

入学式当日から継続して キャリア意識を高める

金沢星稜大
キャリア開発

◎課題意識と狙い

金沢星稜大は経済学部と人間科学部を擁し、地域では中堅に位置する。国立大などの第1志望校に合格できずに入学した学生も多く、かつては挫折感を引きずって4年間を過ごす学生もいることが課題だった。また、元々は経済系単科大にもかかわらず、例えば簿記検定試験の資格取得者は1学年で数人であるなど、大学の特色を生かせていなかった。星稜エクステンションセンターの友部充洋課長は次のように話す。

「公務員や税理士を目指したいと思っても、学内に支援プログラムはなく、専門学校に通わないと合格は厳しい状況でした。不本意入学生生の意欲を高めつつ、その意欲に応えるための支援体制を学内に整える必要があります」

◎取り組み内容

学習への動機付けの取り組みは入学式当日から始まる。新入生とその

保護者を対象に、卒業生の就職状況を約2時間かけて説明。続いて支援プログラムを紹介する。入学部長の村井万寿夫教授は次のように話す。

「学生と保護者に、自身の置かれた状況の厳しさを伝えて危機感を持たせつつ、本学のプログラムを活用すれば就職活動で勝負できる力が付くと伝えていきます。受験では第1志望校不合格という挫折を経験したけれども、4年間の過ごし方次第で逆転は可能だと強調しています」

プログラムの柱は、1・2年次の「基礎ゼミナール」と、課外講座「キャリア・ディベロップメント・プログラム(CDP)」だ(図3)。

基礎ゼミナールでは、専門教育を受ける前段として身に付けておきたい知識・技能を指導する。経済学部の場合、1年次の「基礎ゼミナールI」で講義の受け方やレポートの書き方など大学での学び方全般を指導し、2年次の「基礎ゼミナールII」では金融論や財務分析などを学ばせつつ専門教育への導入を図る。また、「ビジネス基礎演習I・II」にも所属することで、計2人の担当教員から手厚く指導を受ける。

CDPは難関試験合格を目指すための講座で、人間科学部を含めた2学部で「公務員」「税理士」「小学校教員」「総合」の4コースがある。正課とは別に夕方から夜にかけて開講する有料のプログラムだ。特色は、受講は1年次からのみとし、高校段階の履修内容の「学び直し」を含め、4年間かけて基礎から積み上げるカリキュラムとしている点だ。

「公務員コース」の場合、1年次は基礎学力、2年次から法律などの専門科目、3年次からは職種別対策に段階的に進み、公務員試験突破の実践力を付けていく。2005年度の開始以来、CDPの修了生は3期生まで出ているが、公務員試験に延べ59人が合格するなどの実績が出ている。今はCDPの受講を目的とした入学者もいるほどだ。

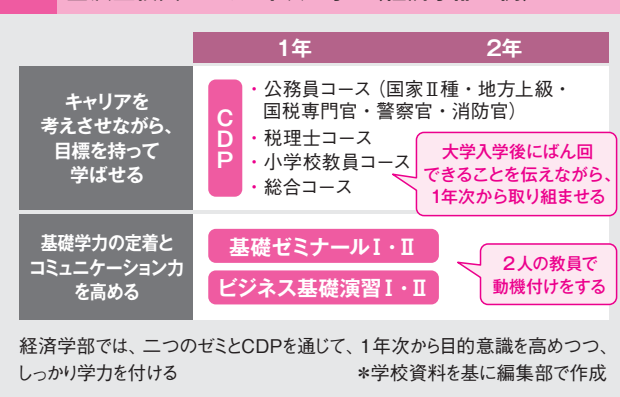
大学入学時に目標がはっきりしていない学生に対しては、基礎ゼミナールで月1回、キャリア教育を行い、キャリアビジョンを考えるプログラムのある「総合コース」で職業研究などを行いながら、将来への意識を育成している。

◎成果と課題

簿記検定試験の受験者は150人以上に上り、公務員や税理士、小学校教員を目指す学生も増えた。新入生の半数以上がCDPを受講し、夜も学内で自習する姿が見られる。

途中で目標が変わりCDPの受講をやめる学生もいるが、そうした学生も新たな目標に向けて頑張っている。CDPで1年次に基礎学力をしっかりと付けていることが、目標実現を後押ししているという。経済学部4年の紺野螢子さんは、「第1志望は国立大で、本学は併願校でした

図3 金沢星稜大 1、2年次の学び(経済学部の例)



が、『公務員コース』で同じような境遇の友だちと出会い、励まし合って頑張れました。目標が変わりCDPは2年生で終了しましたが、それまでに培った力のおかげで希望の企業に就職できました」と話す。

今後の課題は、現状の支援体制からこぼれている学生をいかに支えていくかだ。11年度には教職員共同プロジェクトを立ち上げ、消極的な学生でも自己効力感を高められるような取り組みを模索していく。

自校に誇りを持つことで 学生に自信を持たせる

麗澤大
自校教育

◎課題意識と狙い

不本意入学生の支援には、都市部の中堅大も力を入れている。千葉県にある麗澤大は、学生と教職員の距離が近く、面倒見が良いといわれる大学だ。しかし、学部増設等で大規模化し、かつては自然に出来ていた学生支援を以前より工夫する必要が出てきたと井出元学長補佐は話す。

「第1志望の学生にも不本意入学生にも、重要なのは『麗澤大に来て

良かった』と思える経験をしてもらうことです。それは授業だけでなく、大学での全ての活動に言えること。本学の良さを伝えつつ、学内外の制度を活用し充実した4年間を送るための支援を重視しています」

そのためには、学生の課題意識を1年次から掘り起こすことが必要だと、キャリアセンター長の真殿達教授は話す。

「入学直後から社会で活躍する卒業生の姿を見せることは、社会とのかかわりを考えるきっかけになります。この大学でしっかり頑張れば『自分にも出来る』という自信を付けることにもつながるのです」(図4)

◎取り組み内容

自校の良さを伝えるために強化しているのが自校教育だ。まず、新入生全員参加のオリエンテーションキャンプでは、建学の精神や大学の歴史などを伝える。そして、1年次から選択できるキャリア科目「麗澤スピリットとキャリア」では、大学の歴史や創立者の人生などを学び、キャンパスを散策する。自校教育の目的を井出学長補佐はこう話す。

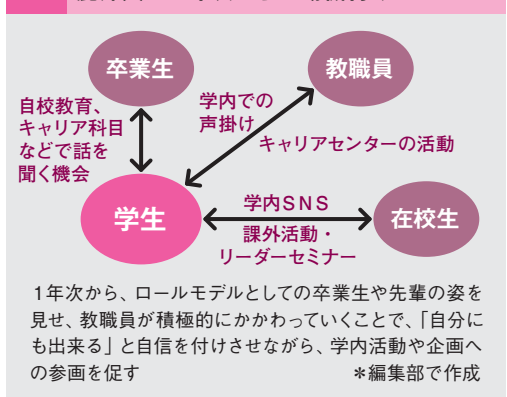
「自分がどんな大学に入学したか

を確認し、大学で学ぶ意義を意識することが、本学での学びの出発点になります。最終的には大学生生活を自分の言葉で語れる学生を育てたいと考えています。そのため、オリエンテーションキャンプや『麗澤スピリットとキャリア』で、教壇に立つのは卒業生です。同じ環境で学んだ卒業生に、本学の歴史や良さ、自分が何を学んだのかを語ってもらっています。就職活動をする则自分の大学について自分の言葉で語れる必要性を痛感するため、卒業生は真剣に話してくれます」

「本学は小規模校であり、卒業生は同窓生が少ない中で社会で頑張っています。転職での苦労話などしてもらい、いろいろな生き方があることを伝えていきます。学生は将来の自分と重ね合わせているためか、真剣に耳を傾けています」(真殿教授)

一方、リーダー格の学生には先輩との縦のつながりだけでなく、横の関係もつくってほしいと、伝統的に「リーダーセミナー」を行っている。学友会役員や部活動の部長、サークルのリーダーや寮長ら60〜70人が集まり、2泊3日の研修を年2回行

図4 麗澤大 1年次からの動機付け



う。ディスカッションなどを通して、1回目は悩みを共有し、2回目はリーダーとして得たものや後輩に引き継ぐことなどを話し合う。

こうしたさまざまな活動を下支えしているのが、学生に対する教職員の密な声掛けだ。そこには全寮制の小規模大だった伝統が息づく。真殿教授は「自分のゼミの学生や知り合った学生の姿を学内で見かけない時は、何度も電話を掛けます。これは甘やかすではなく、きちんと話を聞き、対話することが教育にもなる」と捉えているからです」と話す。ポランティア団体立ち上げなどにかかわった外国語学部4年生の関口和宏

友だちとの目標共有と、
励まし合いが原動力



金沢星稜大人間科学部
経済学科4年
竹口しのぶ
(富山県立滑川高校卒)

私は高校生の頃から小学校教員を目指していましたが、本学は第1志望校ではありませんでしたが、高校の先生に「大学は目標をかなえる通過点ではない」とアドバイスを受け、CDPの「小学校教員コース」の受講を目的に入学を決めました。

1年生の時には4コマの授業を受けた後、すぐにCDPの講義というハードな日もあり、授業との両立は大変でした。入学したばかりで「頑張るぞ」と意欲満々でしたが、2年生、3年生と学年が上がっていくとモチベーションが下がりが気味になりました。そうした時は友だち同士で「一緒に頑張ろう」と声を掛け合い、乗り越えました。今は、受講生同士で模擬授業を見合うなど、目標に向けて協力し合っています。目標が同じ仲間がいるのは心強いです。ゼミナールでは先輩とかかわる機会がたくさんありました。3年生の時には、4年生の先輩がCDP以外の時間も熱心に勉強している姿をよく見かけました。そうした先輩から受けた影響も大きかったと思います。

入学時の職員の声掛けが
大学生活を変えた



麗澤大経済学部
経済学科4年
松尾高治
(千葉県・私立二松学舎大学附
属沼南高校(現二松学舎大学
附属柏高校)卒業)

正直に言って、本学は併願校で、入学当初は暗い気持ちでした。1年生の時はインカレサークルなど学外の活動に参加していませんでした。しかし、その間も頭の隅にあったのは、履修登録を提出した際に職員の方から「やりたことがあるなら何でも相談に乗ります」と言われたことでした。2年生の冬、社会とかかわりを持てるような体験をしたいと思った時にキャリアセンターに足を運んだところ、NPO主催のインターンシップや自治体による学習塾の経営体験を紹介してくれました。大学がどんどんチャンスを与えてくれたことが、私が変わるきっかけになりました。

就職活動では大学での充実した経験をしっかりと話すことが出来、第1志望の企業から内定をいただきました。1年生の時に職員の方から声を掛けられていなければ、今のようにはなれなかったと感じています。今はもっとこの大学を良くしていきたいと、学友会の役員になり、学内フリーペーパーの発行などを担当しています。

さんは、「教職員の方とは学内のオーブンスペースでもすぐ雑談になるくらい距離が近く、私が団体を設立したいと考えた時も気軽に相談し、動くことが出来ました」と語る。

◎成果と課題

「学生自らボランティア活動を始めるなど、学内の活動が活発になり、卒業生が気軽に遊びに来ることが多くなってきました」と真殿教授は学内の変化を語る。就職実績も堅持しており、自分の大学と大学生活を具体的に語れる学生が増えたことも一因ではないかと分析する。

課題は卒業生との連携の強化だ。卒業して間もない世代とはかわわりが深まっているが、上の世代も含めて組織化していきたい考えだ。

進路指導に生かす

前向きな学生ばかりでない現実に向き合い、対策をしているか

不本意入学の学生、目的意識の低い学生に、大学進学の意味や目的を見いだし、意欲を高める工夫はどの大学でも重要だ。とりわけ入学直後のからの働き掛けは効果が高いようだ。金沢星稜大では、目標が変わり

CDPを途中でやめた学生も、主体的に学び続けて納得できる就職先を手にする例が目立つという。学生によつては、学びの意欲が湧くまで時間がかることも考えると、出来るだけ早いうちに手立てを講じる必要があるだろう。

「前向きな理由で入学してきた学生ばかりではない」という現実を真摯に向き合い、そうした学生を育成する施策を講じている大学かどうか、併願大を検討する際にはこうした方針を確認する必要があるのではないかと。大学資料を見れば、大学の取り組み内容が分かる。更に、オンラインキャンパスで学生と教職員の関係を観察することによって見えてくることもあるはずだ。

「どのような方法で育てているのか」「4年間を通じて継続的に意欲を高める機会を提供しているか」という視点で大学を見れば、一歩踏み込んだ志望校選びが出来そうだ。

ご意見・ご感想をお寄せください

◎ 今回の内容に関するご感想やご意見、今後取り上げてほしいテーマなど、編集部にお寄せください。
e-mail: view21_since-1975@mail.benesse.co.jp

全ての受験生はライバルであり、同志である

特別企画 「東日本大震災 被災地の教師と生徒の想い」は重く受け止めた。当たり前前に学校で勉強できることの真の大切さを改めて感じた。また、被災地の今を生きる高校生と教師の声が聞けて、心から応援したくなった。今回の震災は被災地の高校生にとって大きなハンデイダと思う。しかし、全ての受験生は良きライバルであり、同志である。皆さんの進路が実現することを祈ります。一緒に頑張りましょう。

「広島県福山市立福山中学・高校・松村和司」

被災地の高校生の言葉を全国の高校生に届けたい

特別企画 「東日本大震災 被災地の教師と生徒の想い」を読み、生徒一人ひとりと向き合い、生徒を支えていこうとする先生方の熱い想いを感じた。改めて「自分も頑張らなくては」という想いを強くした。被災地の高校生の「言葉」は全国の高校生に響き、全国の高校生の「生き方」考え方の転機になるように思う。そういう情報発信も考えていくべきだと感じた。[滋賀県・匿名希望]

中高が互いを知るためには構造改革も必要

6月号の特集では、中学校までは能動的に授業を受けているのに対して、高校では受動的な雰囲気を読み取れた。また、教師の視点から考えても、大いに触発される内容があり、単なるデータの理解だけにとどめず、そこから見える事柄を解釈し、改善していかなければならないと感じた。中学校は高校の、高校は中学校の授業内容に無関心であることが多く、扱われている教材も知らずに過ごしている。この構造的な欠陥にもくさびを打

VIEW'S SQUARE

Volume 2

読者のページ

教育最前線からのホットな話題を紹介します

ち込まなければならないように感じられた。

「三重県立四日市中央工業高校・井上和也」

ブレのない指導を目指していきたい

6月号「指導変革の軌跡」の三重県立四日市高校の記事を読み、学校としての指導スタイルを確立して、学年、先生によってブレのない指導を行える学校にすることは、生徒・保護者に対する学校の責務であると思った。品質に違いがあるような製品は売り物にならないし、サービスにブレがある店舗は社会で認められない。学校も同様であることをもっと意識していくことが大切であると思う。そのような観点から、三重県立四日市高校が指導マニュアルで面談の対象者、面談内容、面談の進め方など、きめ細かい指導体制を構築していることは大変参考になった。また、学力検討会の内容も的を射た具体的でタイムリーな内容で、大変参考になった。

「右手県立軽米高校・川村俊彦」

教師川柳

震災を越えてつなげる学びの輪

兵庫県・とんちんかん

お知らせ

文部科学省が
被災地の学校と提供者を結ぶ
マッチングサイトを開設しています

「東日本大震災 子どもの学び支援ポータルサイト」

<http://manabishien.mext.go.jp/>

編集後記

小学校の先生からこんな言葉をいただきました。「教えるとは希望を語ること、学ぶとは誠実さを胸に刻むこと」。フランスの詩人の言葉だそうです。その先生は「果たして私は、そんな教育や学びを実践できているのか」と自問されていました。

変化の時こそ、教育の不易を見直す時です。新課程移行期の今、先生方が大切にされてきた教育の不易を改めて見直す契機にしてほしいと思います。『VIEW21』でも、変化の時だからこそ大切なものが何かを、問い続けていきます。(小泉)

VIEW21 9月号 Vol.3

2011年8月24日発行

発行人 新井健一
編集人 原 茂
発行所 (株)ベネッセコーポレーション Benesse教育研究開発センター
印刷製本 (株)ビーヴィコーポレーション
編集協力 (有)ペンダコ
執筆協力 中丸満、二宮良太、山口慎治
撮影協力 荒川潤、神崎博文、谷口恭、松原誠、ヤマグチイッキ
イラスト協力 山本重也

VIEW21編集部
〒163-0411 東京都新宿区西新宿2-1-1 新宿三井ビルディング13階
電話 03-5320-1287

©Benesse Corporation 2011

VIEW21

2011
October
10月
Volume 4

次号は
10月19日発行(予定)
「VIEW21」高校版は
年6回の発行です